NIHU

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構

国立民族学博物館

要覧

2025

国立民族学博物館

要覧 2025

目次

ごあいさつ 1
設置目的と機能 2
組織 3
研究活動 8
博物館の共同利用 24
- 共同利用型科学分析室 24
- 図書室 25
- 資料 26
- 展示 28

国際協力 36
社会連携 37
データ集 41
- 沿革 42
- 歴代館長／名誉教授 43
- 施設 45
- 国内外の協定 46
- 資料とデータベース 48

人間文化研究機構 52
総合研究大学院大学 54
利用案内 56

表紙
「影絵人形(グヌンガン)」(インドネシア)より

ごあいさつ

国立民族学博物館(略称みんぱく)は、民族学・文化人類学とその関連分野の研究を推進する大学共同利用機関として1974(昭和49)年6月に創設されました。

これまでみんぱくの研究者は、世界各地でのフィールドワークを通して、人類文化の多様性と共通性、社会の動態について国内外の研究者と共同研究を行ってきました。その成果は、論文などの刊行物で発表するばかりでなく、展示という手法を通じて公開してきました。また、みんぱくには、総合研究大学院大学(総研大)の博士後期課程の人類文化研究コースが併設されており、みんぱくのミッションに連動した専門教育を行ってきました。このような研究、展示(博物館)、そして教育を連動させた文化人類学、民族学の機関は世界でも希といえるでしょう。

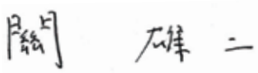
世界ではグローバル化と分断が併存しているように見えます。元々、社会、経済、文化が国や地域を超えてつながりを持つことになるグローバル化の原点は15世紀の大航海時代に遡るといわれています。ヨーロッパ人に征服されたアメリカ大陸の先住民は、厳しい強制労働や外部からもたらされた病気により急激に人口を減少させるという苦難を経験しました。それ以降、急激な環境破壊が進行したこともグローバル化がもたらした弊害としてよく指摘されます。近年の新型コロナウィルス感染症のパンデミックの災禍も、歴史の繰り返しとグローバル化の危うさを顕在化させるものでした。たしかにグローバル化は、負の現象を引き起こしてきましたが、その反面、世界各地の集団は、グローバル化を支える移動手段や情報機器の発達を巧みに利用しながら、独自の文化を創造してきたことも事実です。またグローバル化の負の側面を批判、修正すべく、人権、先住民の権利など普遍的な思想が次々と生まれ、それにより抑圧されてきた人々が声を大にして異議申し立てをすることもできるようになりました。

ところが、そのパンデミックを境に社会の転換点を迎えたといわれる現在、世界では人類や地球といった視点よりも個別の関心に閉じ込もる傾向が目につきます。分断と言われる現象もこの一つです。国を含む各地域の集団が、それぞれの物語を紡ぎ出すことは文化の多様性を確保する意味で、否定するどころか尊重すべきかと思います。しかし、他者の物語や歴史に思いをはせ、共感し、寛容の心を併せ持たないままでは、個々の物語をぶつけ合うだけの不毛な世界しか生み出さないでしょう。人類全体、地球全体を視野におきつつ、個別の文化と社会の存在を認めていく態度こそが今こそ求められているのです。

こうした意識のもと、みんぱくでは、館を代表する研究として「ポスト国民国家時代における民族」を推進しています。混迷を深める世界の状況の中で、国家と民族との関係性を改めて多角的に分析し、人類がともに手を携えて生きていく共生社会の実現を展望していこうというものです。また、50年近く収集し、収蔵してきた標本・映像資料を、それらの資料の提供者、提供集団との間で共有し、改めて資料の意味を問い直すとともに、データベース化していくという「フォーラム型人類文化アーカイブズの構築」プロジェクトも推進しています。文化を語るのは、もはや研究者だけでないことは、なかば常識化しています。資料を作り、伝えてきた人々と研究者とが協働作業を行うことで、フォーラムの場が生まれ、これまでとは異なる知見が得られ、研究の新たな地平を拓くことができます。また研究成果を共有することは、現地の人々自身がそれらを社会発展に利用していくことにもつながるでしょう。共生社会の実現に向けた国際協力の先鋭的な試みだと考えています。

このようにみんぱくは、共同研究と成果公開、人材育成を通じて、よりよき人類社会の指針を示していくことに邁進していくつもりです。今後も、皆さまからのご支援、ご協力を、心からお願い申し上げます。

国立民族学博物館長



国立民族学博物館創設50周年記念史刊行

創設50周年を記念して『語りあい ひらける世界—みんぱく五十年の歩み』が令和6年12月25日に刊行されました。本書は、現代世界との関わり、研究博物館としての役割、国内外の研究者との交流、現研究部スタッフの研究テーマなどをわかりやすく描き出し、研究者コミュニティーおよび社会一般に広く発信します。また、『国立民族学博物館50年史アーカイブズ』では、管理運営、研究、社会連携、展示関係、大学院教育、出版、記念写真展のカテゴリーにわけてデータベース化し、ウェブサイト上に公開しています。

https://www.r.minpaku.ac.jp/anniversary/50data/index.html

設置目的と機能

設置目的

本館は、文化人類学・民族学に関する調査･研究をおこなうとともに、民族資料の収集･保存・整理・研究・公開・教育普及などの活動をすすめ、世界の諸民族の社会と文化に関する情報を人々に提供し、諸民族についての認識と理解を深めることを目的としています。なお、本館は、大学共同利用機関として、国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和49年法律第81号）により設置され、平成16（2004）年4月に国立大学法人法（平成15年法律第112号）により大学共同利用機関法人･人間文化研究機構の一員として新たな出発をしました。

機能

研究所

本館は博物館機能をもった研究所です。文化人類学・民族学を核とし、その隣接諸分野の研究をおこない、我が国の文化人類学・民族学研究のセンターとしてその機能を十分に発揮すると同時に、研究の成果を出版その他さまざまな形で公開し、研究者コミュニティと一般市民への情報提供と研究広報をおこなっています。本館の研究者は、文化人類学・民族学や言語学、生態人類学、考古学、民族技術、民族芸術、地域研究、博物館学などを専門とするスタッフで構成されています。

共同利用

本館は大学共同利用機関として、研究者コミュニティに支えられた共同研究をおこなう開かれた研究所です。国内の大学や研究所等の研究者だけでなく海外の研究者とも協働し、さまざまな研究プロジェクトを企画･実施しています。また、収集・保管する資料は研究のために広く利用されています。

情報センター

諸民族の社会と文化を知るための標本資料、映像・音響資料、文献図書資料、HRAF（Human Relations Area Files）、および調査・研究の過程で生成・蓄積された多様なアーカイブズ資料などの諸資料を収集し、保存・管理し、情報の整備をおこなっています。諸資料の情報はデータベース等により幅広く公開し、活用をはかっています。

展示公開

研究の成果について展示を通じて公開しています。本館の研究者は、展示の企画、運営をおこなっており、研究と展示を緊密に連携させることを基本方針としています。
本館展示は、世界の諸民族の文化と社会を大きく地域ごとに分けた地域展示と、音楽、言語などの人類文化に普遍的に見られる諸現象を対象とした通文化展示で構成されています。また、急速に変化する世界の動きや、文化人類学･民族学の研究を迅速に展示に反映させるため、本館展示場内で企画展示やコレクション展示を実施しています。
さらに、特定のテーマについて、総合的および体系的に紹介する特別展示を開催しています。

社会還元

最先端の研究成果を一般に公開するため、学術講演会、みんぱくゼミナール、みんぱくウィークエンド・サロン、研究公演、みんぱく映画会や種々のワークショップなどをおこなっています。また、博物館とコミュニティ開発コースなどさまざまなプロジェクトを通して国際協力に貢献しています。

大学院教育

本館は総合研究大学院大学を構成する基盤機関のひとつであり、先端学術院先端学術専攻の人類文化研究コース（博士後期課程）がおかれています。文化人類学・民族学とその関連分野の学術領域に蓄積された知見と方法論を修得し、それらを応用して高度な研究を推進しうる研究者を育成しています。また、諸大学の大学院教育に協力し、連携教育プログラムも実施しています。

組織

運営組織　令和7年4月1日現在

館長
関 雄二（せき ゆうじ）

副館長（研究・国際交流・IR担当）
平井京之介（ひらいきょうのすけ）
人類文明誌研究部教授

副館長（企画調整担当）
福岡正太（ふくおかしょうた）
人類文明誌研究部教授

監査室　室長（併）
須原愛記（すはらあき）
管理部長

事務組織　令和7年4月1日現在

管理部　部長　須原愛記（すはらあき）

情報管理施設　施設長（併）　福岡正太（ふくおかしょうた）　副施設長（併）　須原愛記（すはらあき）

総務課	研究協力課	財務課	企画課	情報課
課長	課長	課長	課長	課長
魚井慶太（うおいけいた）	小野友康（おのともやす）	藤本健司（ふじもとけんじ）	小野栄津夫（おのえつお）	中山貴弘（なかやまたかひろ）

運営会議　令和7年4月1日現在

館長の要請により、本館の管理運営に関する重要事項について審議します。

外部委員

岡田浩樹
神戸大学大学院国際文化学研究科教授

木川りか
九州国立博物館学芸部博物館科学課長

窪田幸子
学校法人芦屋学園芦屋大学長
神戸大学名誉教授

後藤 明
喜界島サンゴ礁科学研究所学術顧問

佐々木重洋
名古屋大学大学院人文学研究科教授

高倉浩樹
東北大学東北アジア研究センター教授

富沢壽勇
静岡県立大学副学長
静岡県立大学国際関係学部特任教授

中谷文美
関西学院大学社会学部教授

水沢 勉
神奈川県立近代美術館元館長

内部委員

島村一平
国立民族学博物館
人類文明誌研究部長

丹羽典生
国立民族学博物館
超域フィールド科学研究部長

野林厚志
国立民族学博物館
グローバル現象研究部長

日高真吾
国立民族学博物館
学術資源研究開発センター長

平井京之介
国立民族学博物館副館長（研究・国際交流・IR担当）・国際研究統括室長

福岡正太
国立民族学博物館副館長(企画調整担当)・情報管理施設長

三尾 稔
国立民族学博物館
グローバル現象研究部教授
（総合研究大学院大学先端学術院先端学術専攻人類文化研究コース長）

山中由里子
国立民族学博物館
人類基礎理論研究部長

外部評価委員会　令和7年4月1日現在

館長の要請により、本館における研究教育活動等の状況に関する点検・評価について審議します。

市川光雄
京都大学名誉教授

岡崎淑子
聖心女子大学元学長/名誉教授

亀井温子
独立行政法人国際協力機構JICA
緒方貞子平和開発研究所副所長

高野明彦
国立情報学研究所名誉教授

出口 顕
放送大学島根学習センター所長

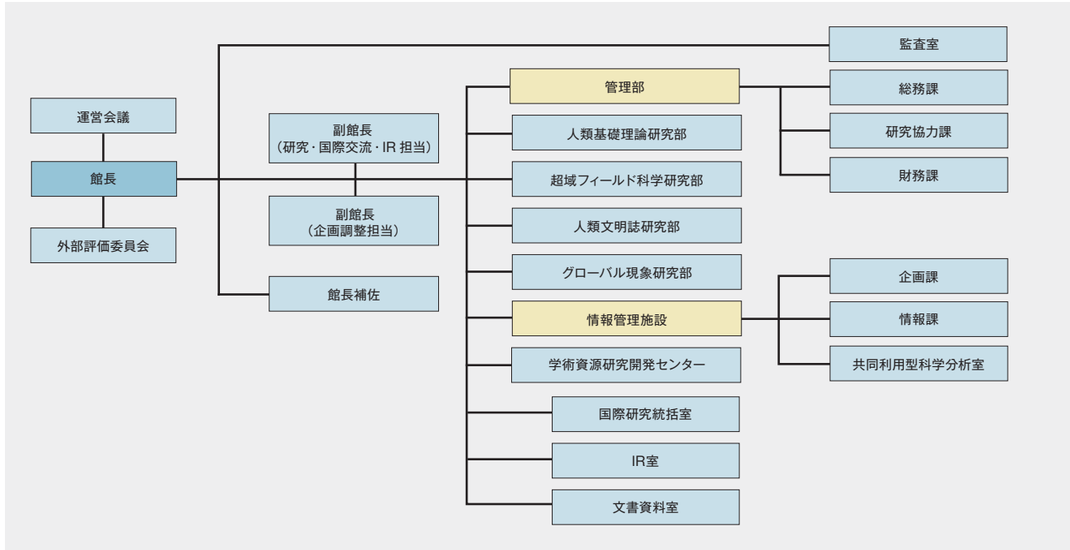
後小路雅弘
北九州市立美術館館長

岡橋達哉
公益財団法人りそな
アジア・オセアニア財団理事長

崎元利樹
公益財団法人関西・
大阪21世紀協会理事長

田中雅一
国際ファッション専門職大学副学長

組織構成図　令和7月1日現在



研究組織 令和7年7月1日現在

人類基礎理論研究部 部長 山中由里子

人類科学の基礎分野を対象とする理論的研究の深化によって新たな学術的課題を抽出し、学融合的新領域を創出することを目的としています。

教授

川瀬 慈（かわせ いつし）
映像人類学

丸川雄三（まるかわゆうぞう）
連想情報学・文化財情報発信

菊澤律子（きくさわりつこ）
言語学・オーストロネシア諸語

山中由里子（やまなかゆりこ）
比較文学・比較文化

廣瀬浩二郎（ひろせこうじろう）
日本宗教史・民俗学

准教授

岡田恵美（おかだえみ）
音楽民族学・南アジア研究

平野智佳子（ひらのちかこ）
文化人類学・オーストラリア先住民研究

末森 薫（すえもり かおる）
文化財科学・東洋美術研究

吉岡 乾（よしおか のぼる）
言語学・南アジア研究

助教

高科真紀（たかしなまき）
アーカイブズ学・資料保存論

宮前知佐子（みやまえちさこ）
文化財科学・文化資源活用

特任助教

市野進一郎（いちのしんいちろう）
評価・IRに関連する業務

超域フィールド科学研究部 部長 丹羽典生（にわのりお）

世界諸地域を対象とする地域エスノグラフィー的研究の深化によって新たな超域的研究基盤を確立し、人類学的地域研究の新領域を創出することを目的としています。

教授

飯田 卓（いいだ たく）
生態人類学・漁民研究

丹羽典生（にわのりお）
社会人類学・オセアニア地域研究

樫永真佐夫（かしながまさお）
東南アジア文化人類学

松尾瑞穂（まつおみずほ）
文化人類学・南アジア研究

韓 敏（かんびん）
社会人類学・中国研究

南 真木人（みなみまきと）
生態人類学・南アジア研究

准教授

市川 彰（いちかわ あきら）
メソアメリカ考古学、ラテンアメリカ地域研究

太田心平（おおたしんぺい）
社会文化人類学・北東アジア研究

助教

浅田直規（あさだなおき）
文化人類学・東欧研究

藤井真一（ふじいしんいち）
文化人類学・オセアニア地域研究

人類文明誌研究部 部長 島村一平（しまむらいっぺい）

現代の人類が直面する課題に関して、過去の事象から未来を見通す学際的アプローチによって未来文明を展望する新たな価値を創出することを目的としています。

教授

上羽陽子（うえばようこ）
民族芸術学・染織研究・手工芸研究

平井京之介（ひらいきょうのすけ）
経済人類学・東南アジア研究

齋藤 晃（さいとうあきら）
ラテンアメリカ歴史人類学

福岡正太（ふくおかしょうた）
民族音楽学・東南アジア研究

島村一平（しまむらいっぺい）
文化人類学・モンゴル地域研究

准教授

伊藤敦規（いとうあつのり）
社会人類学・アメリカ先住民研究

松本雄一（まつもとゆういち）
アンデス考古学・ラテンアメリカ地域研究

藤本透子（ふじもとうこ）
文化人類学・中央アジア地域研究

助教

池邉智基（いけべともき）
文化人類学・アフリカ地域研究

鈴木昂太（すずきこうた）
民俗学・芸能史研究

グローバル現象研究部 部長 野林厚志（のばやしあつし）

現代の人類が直面する課題に関して、地域の事象から世界を俯瞰する学際的アプローチによってグローバル社会を展望する新たな価値を創出することを目的としています。

教授

卯田宗平（うだしゅうへい）
環境民俗学・東アジア研究

信田敏宏（のぶたとしひろ）
社会人類学・東南アジア研究

野林厚志（のばやしあつし）
民族考古学・台湾研究

三尾 稔（みおみのる）
文化人類学・南アジア研究

准教授

相島葉月（あいしまはつき）
社会人類学・イスラーム学・中東研究

中川 理（なかがわ おさむ）
文化人類学・ヨーロッパ研究

鈴木英明（すずきひであき）
インド洋海域史・スワヒリ社会研究

八木百合子（やぎゆりこ）
文化人類学・ラテンアメリカ地域研究

諸 昭喜（ちょ そひ）
医療人類学・北東アジア研究

助教

黒田賢治（くろだけんじ）
中東地域研究・文化人類学

上記の各研究部は、第一超域（日本、東アジア、東南アジア、中央･北アジア）、第二超域（南アジア、西アジア、アフリカ）及び第三超域（ヨーロッパ、北米、中南米、オセアニア）を対象として調査・分析をおこなう研究スタッフからなる3つの研究ユニットを構成し、地球規模のパースペクティブによる研究戦略を遂行するものとなっております。
また、上記の各研究部による組織的研究力を強化し、共同利用・共同研究の面での機能強化を実現するために次の組織を設置しています。

学術資源研究開発センター センター長 日髙真吾（ひだかしんご）

学術資源の共同利用性を学際的かつ国際的に高めるための研究プロジェクトを立案し推進することを目的としています。

教授

小野林太郎（おのりんたろう）
海洋考古学・東南アジア地域研究

日髙真吾（ひだかしんご）
保存科学

准教授

齋藤玲子（さいとうれいこ）
アイヌ･北方先住民文化研究

奈良雅史（ならまさし）
文化人類学・中国研究

寺村裕史（てらむらひろふみ）
文化情報学・情報考古学

三島禎子（みしまていこ）
文化人類学・西アフリカ研究

助教

河西瑛里子（かわにしえりこ）
文化人類学・ペイガン研究

野口泰弥（のぐちひろや）
文化人類学･北米北方地域研究

マーク・ウィンチェスター
アイヌ近現代思想史

国際研究統括室 室長（併） 平井京之介（ひらいきょうのすけ）

新領域の開拓のための共同利用型研究体制の基盤整備及び国際・国内戦略を立案し統括することを目的としています。

相島葉月（あいしまはつき）（兼）
グローバル現象研究部准教授

卯田宗平（うだしゅうへい）（兼）
グローバル現象研究部教授

松尾瑞穂（まつおみずほ）（兼）
超域フィールド科学研究部教授

市川 彰（いちかわ あきら）（兼）
超域フィールド科学研究部准教授

樫永真佐夫（かしながまさお）（兼）
超域フィールド科学研究部教授

三尾 稔（みおみのる）（兼）
グローバル現象研究部教授

IR室 室長（併） 平井京之介（ひらいきょうのすけ）

市野進一郎（いちのしんいちろう）（兼）
人類基礎理論研究部特任助教

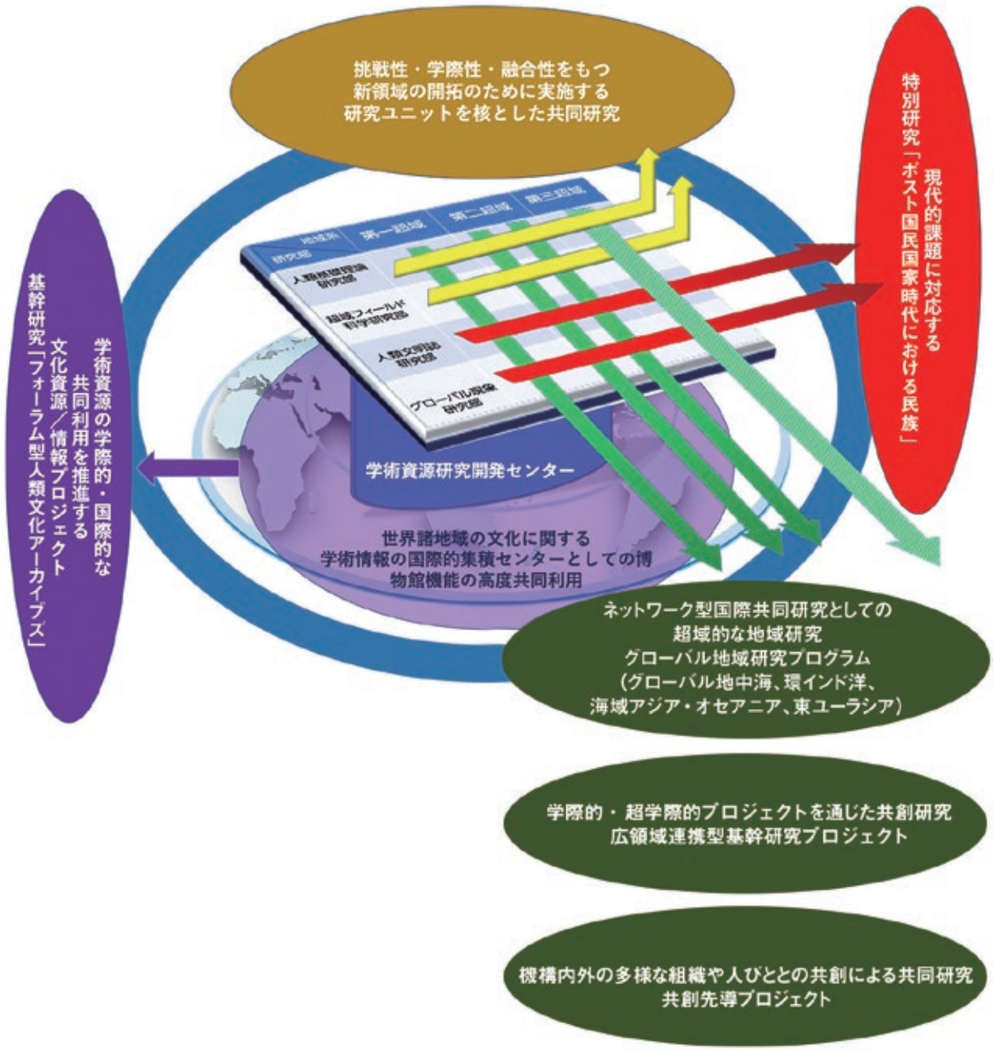
河西瑛里子（かわにしえりこ）（兼）
学術資源研究開発センター助教

鈴木昂太（すずきこうた）（兼）
人類文明誌研究部助教

文書資料室 室長（併） 飯田 卓（いいだ たく）

丸川雄三（まるかわゆうぞう）（兼）
人類基礎理論研究部教授

高科真紀（たかしなまき）（兼）
人類基礎理論研究部助教



特別客員教員

人類基礎理論研究部

土井冬樹（どいふゆき）
天理大学国際学部講師
日本人によるオセアニアコレクションの形成とモノの来歴―東大資料とみんぱくコレクションを中心に

超域フィールド科学研究部

佐倉 統（さくらおさむ）
実践女子大学人間社会学部社会デザイン学科教授
テクノアニミズムの理論的検討およびその科学技術社会論的展望

津村文彦（つむらふみひこ）
名城大学外国語学部教授
呪術的偶然性と共同性の人類学的研究

縄田浩志（なわたひろし）
京都大学大学院人間・環境学研究科附属学術越境センター教授
片倉もとこのサウジアラビア関連資料の研究

岩谷洋史（いわたにひろふみ）
姫路独協大学人間社会学群講師
フォト・エスノグラフィーの実践に関する方法論の検討

人類文明誌研究部

井上敏昭（いのうえとしあき）
城西国際大学国際人文学部教授
国立民族学博物館所蔵の北方デネー（北方アサバスカン）関連資料の活用に関する研究

中生勝美（なかおかつみ）
桜美林大学リベラルアーツ学群教授
民博アーカイブに基づく人類学史研究

和田 礼（わだれい）（ダースレイダー）
ラッパー・作家・評論家・映画監督
辺境・日本におけるヒップホップの特殊性と普遍性に関する研究

櫻間瑞希（さくらまみずき）
大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻講師
非欧米圏ポピュラー音楽の実践に見る新たな文化動態

グローバル現象研究部

中尾世治（なかおせいじ）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科准教授
アフリカの人びとはいかに「アフリカ史」を語ってきたか―アフリカのローカルな歴史からみた「アフリカ史学史」

学術資源研究開発センター

北原モコットゥナシ（きたはら）
北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授
アイヌ文化と隣接する諸文化の連続性・差異性

外国人研究員

BUCHOWSKI Michal Janusz（ブホフスキ ミハル ジャヌス）
アダム・ミツキェビチ大学（ポーランド）・教授
令和7年9月16日～令和7年12月12日
支配的多数派と被支配的マイノリティの集団間関係に関する比較研究

LAHN Julie Maree（ラーン ジュリー マリー）
オーストラリア国立大学（オーストラリア）・フェロー
令和7年12月3日～令和8年2月18日
デジタル返還に関する公共人類学的研究

LUCY Riall（ルーシー ライル）
欧州大学院（イタリア）・教授
令和6年11月1日～令和7年10月31日
イタリアの非公式帝国と地中海的モビリティの役割に関する歴史学的研究（19－20世紀）

※令和7年度在籍または招へい予定（令和7年4月1日現在）の者、アルファベット順。

機関研究員

邱 君妮（ちょうちゅんに）
文化資源を活用した研究情報の発信、普及の理論と実践に関わる業務

古沢ゆりあ（ふるさわ）
フォーラム型人類文化アーカイブズを中心とした学術情報の共同利用に関する支援業務

プロジェクト研究員

石山 俊（いしやましゅん）
「学術知デジタルライブラリの構築」の推進に関する業務

川畑祐貴（かわばたゆうき）
地理と歴史を融合した言語の変化と発展に関する研究業務

河村友佳子（かわむらゆかこ）
文化資源計画事業「有形文化資源の保存・管理システム構築」に係る研究補助

小林直明（こばやしなおあき）
「学術知デジタルライブラリの構築」の推進に関する業務

鈴木博之（すずきひろゆき）
地理と歴史を融合した言語の変化と発展に関する研究業務

平 英司（たいらえいじ）
手話言語関連の研究、研究補佐および関連事業の運営に関する業務

竹本直也（たけもとなおや）
共創先導プロジェクト共創促進研究「コミュニケーション共生科学の創成」に関する業務

橋本沙知（はしもとさち）
文化資源計画事業「有形文化資源の保存・管理システム構築」に係る研究補助

劉 俊昱（りゅうしゅんいく）
「サビエンス数理先史学―新人拡散にともなう文化進化モデリング」に関する業務

機構特別研究員

谷 憲一（たにけんいち）
特別研究員（PD）
イランのアーザリーを事例としたエスニック・アイデンティティとナショナリズムの相克と共在をめぐる研究

仲尾友貴恵（なかおゆきえ）
特別研究員（RPD）
東アフリカにおける社会福祉の発展と帝国内移民：インド系ムスリム移民と近代性の関係

人間文化研究機構 人間文化研究創発センター研究員

グローバル地域研究プログラム 総括班事務局

山崎暢子（やまざきのぶこ）
特任助教

グローバル地中海地域研究プロジェクト

岡本尚子（おかもとなおこ）
特任助教

環インド洋地域研究プロジェクト

松井 梓（まついあずさ）
特任助教

海域アジア・オセアニア研究プロジェクト

門馬一平（もんまいっぺい）
特任助教

東ユーラシア研究プロジェクト

赤尾光春（あかおみつはる）
特任助教

人文知コミュニケーター

工藤さくら（くどう）
特任助教

コミュニケーション共生科学の創生

桂 融（けいゆう）
特任助教

学術資源研究開発センター

学術資源研究開発センターは、本館が所蔵する学術資源の学際的かつ国際的共同利用性を高度化することを目的として、平成29年4月1日に設置されました。

学術資源研究の開発

国立民族学博物館には、約34万6千点の標本資料や約7万点の映像・音響資料、約69万8千冊の書籍、本館の所蔵資料をはじめ、多様な研究資料や写真資料、研究成果に関連するデータベース、文化人類学者・民族学者が残したフィールドノートや調査資料からなる民族学研究アーカイブズ等があります。これらは人類の文化や活動に関わる文化資源であり、人類の過去、現在、そして未来を考えるための貴重な学術資源でもあります。本館では、これらの学術資源に関する研究成果や情報を「フォーラム型情報ミュージアム」とよばれるデータベースや、特別展・企画展・巡回展など多様な媒体を利用して公開するなど、学術資源の共同利用性を学際的かつ国際的に高めるプロジェクトを実施しています。本センターでは、これらの研究プロジェクトを支援するとともに、新たに立案し、推進します。

令和6年度成果

「フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進」に関連して基盤型プロジェクト4件と推進型プロジェクト5件の推進を支援するとともに、みんぱく創設50周年記念国際シンポジウム「デジタル人文知が作られるとき」を開催したほか、各プロジェクトの研究集会として、国際シンポジウム「Decolonizing Collection: Focusing on Indigenous Australian in Japan」などを開催しました。また、みんぱく創設50周年記念特別展「日本の仮面――芸能と祭りの世界」、「吟遊詩人の世界」などの準備と開催を支援しました。さらに、学術資源の共同利用性の高度化のための研究を実施しました。

令和7年度事業

令和7年度には、おもに3つの事業を展開します。

フォーラム型人類文化アーカイブズプロジェクトの研究推進と支援

令和4年度より人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクト「フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進」を実施しています。令和7年度には、「オーストラリア先住民資料」、「オセアニア資料アーカイブス」など4件の基盤型プロジェクトと、「西アジア北東部の文化動態と物質文化」、「朝鮮半島の装い」など4件の推進型プロジェクトを実施します。本センターでは、標本資料名の統一化・多言語化などについて研究するとともに、データベースの構築や編集、発信などに関して各プロジェクトの推進を支援します。

特別展・企画展・巡回展プロジェクトの研究推進と支援

学術資源やそれらに関連する研究成果を公開するために、特別展や企画展、巡回展等を実施しています。令和7年度には、みんぱく創設50周年記念特別展「民具のミカタ博覧会―見つけて、みつめて、知恵の素」、特別展「舟と人類―アジア・オセアニアの海の暮らし」などを実施します。本センターでは、これらの展示をおこなうための研究を進めるとともに、実施するための支援をおこないます。

学術資源の共同利用性の高度化に関する研究

いかにすれば本館の学術資源の学際的・国際的な共同利用化が進展し、大学教育や学術研究、知識の一般社会への普及、文化の担い手による文化の創成等に効果的に貢献できるかについて研究します。

国際研究統括室

国際研究統括室は、各研究部ならびにセンターによる組織的研究力を強化し、共同利用・共同研究の面での機能強化を図るために、旧研究戦略センターと旧国際学術交流室が担ってきた国内および海外との共同研究・共同利用に係る研究戦略機能を統合的に引き継ぎ、新領域の開拓のための共同利用型研究体制の基盤整備及び国際・国内戦略を立案し統括することを目的として、平成29年4月に設置されました。具体的には、共同利用型研究プロジェクトの実施体制の改善、学術交流協定（国内外）締結方針の策定と締結、海外研究動向調査、外部資金に関する情報収集と情報提供など、本館がより戦略的かつ組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進していくために必要な活動をおこなっています。

IR室

IR（インスティテューショナル・リサーチ）室は、本館の研究、教育等に関する活動についてのデータを収集・分析し、これら活動における計画・立案及び意思決定に活用することにより、館の運営機能の強化・改善に資することを目的として、平成28年4月に設置されました。
この目的を達成するために、（1）情報の収集及び公開、（2）情報の分析及びその結果の公開、（3）情報収集・分析結果をもとにした改善案の提案等、といった業務をおこなっています。
本館は、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員として文部科学大臣が進める6年間の中期目標に基づく中期計画及び年度計画を策定し、その実施状況について国立大学法人評価委員会の評価を受けています。また、本館独自で自己点検・評価を実施しており、本館の研究教育活動等の状況をまとめた「自己点検報告書」を作成しています。IR室はこれらの点検・評価等において情報の収集及び分析、取りまとめ等を担っています。

文書資料室

2013（平成25）年より活動してきた梅棹資料室の業務を継承し、2025（令和7）年に文書資料室を設置しました。初代館長梅棹忠夫の残したアーカイブズ資料は、フィールドノート、スケッチ、写真、メモ、原稿、著作、書評など多種多様です。それらを整理・保管し、学術研究等への活用を支援してきた実績をもとに、梅棹忠夫アーカイブズと本館の歴史に関わる館史アーカイブズを運営します。

特別研究

特別研究とは、国内外の学術研究の動向や社会的な要請を踏まえ、学際性を高めることにより、異分野融合や新たな学問分野の創出に向けて、国立民族学博物館が独自に組織し実施する挑戦的な研究です。 平成28年度からの第3期中期目標期間の6年間においては、「現代文明と人類の未来―環境・文化・人間」を統一テーマに掲げ、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチを行いました。
令和4年度からはじまった第4期中期目標期間の6年間においては、第3期中期目標期間から継続して実施するプロジェクトに加え、「ポスト国民国家時代における民族」という共通タイトルのもとに、5つの研究プロジェクトを構成して実施しています。 ポスト国民国家時代における「民族」の再編成の過程を文化、政治、宗教、社会、環境、歴史等の全体論的な視点からとらえ、人類の共生社会の実現に寄与する新しいアプローチを提示することを目指します。

特別研究一覧　令和4年度～令和9年度

共通テーマ「ポスト国民国家時代における民族」

研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
鈴木 紀	ポストナショナリズム時代の博物館の挑戦 ― 少数/先住民族の文化をいかに展示するか	民族と博物館	令和4年4月～令和7年3月
野林厚志	個人、帰属集団、国家の意思をめぐる相克の解明と多文化国家の実現	民族と国家	令和5年4月～令和8年3月
松尾瑞穂	ルーツをめぐる政治学と共生の技法 ― ポスト国民国家時代の民族と「歴史」	民族と歴史	令和6年4月～令和9年3月
奈良雅史	民族と宗教―もつれ合う排他性と包摂性	民族と宗教	令和7年4月～令和10年3月
丹羽典生	政治的暴力・コンフリクトと民族	民族と暴力	令和8年4月～令和11年3月

特別研究ロードマップ　令和4年度～令和10年度

共通テーマ「ポスト国民国家時代における民族」

テーマ区分	研究プロジェクト	研究代表者	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度	令和9年度	令和10年度
民族と博物館	ポストナショナリズム時代の博物館の挑戦―少数/先住民族の文化をいかに展示するか	鈴木 紀	令和4年4月1日 ～ 令和7年3月31日						
民族と国家	個人、帰属集団、国家の意思をめぐる相克の解明と多文化国家の実現	野林厚志		令和5年4月1日 ～ 令和8年3月31日					
民族と歴史	ルーツをめぐる政治学と共生の技法―ポスト国民国家時代の民族と「歴史」	松尾瑞穂			令和6年4月1日 ～ 令和9年3月31日				
民族と宗教	民族と宗教―もつれ合う排他性と包摂性	奈良雅史				令和7年4月1日 ～ 令和10年3月31日			
民族と暴力	政治的暴力・コンフリクトと民族	丹羽典生					令和8年4月1日 ～ 令和11年3月31日		

館外開催の研究会の様子

沖縄・読谷村史編纂資料室での資料データベース熟覧の様子

令和6年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
松尾瑞穂	ルーツをめぐる政治学と共生の技法―ポスト国民国家時代の民族と「歴史」
野林厚志	個人、帰属集団、国家の意思をめぐる相克の解明と多文化国家の実現
鈴木 紀	ポストナショナリズム時代の博物館の挑戦―少数/先住民族の文化をいかに展示するか

みんぱく公開講演会

「民族×アートの現在――美をめぐる政治のゆくえ」

実施日　令和6年11月8日
研究代表者　松尾瑞穂
参加者総数　431名

みんぱく創設50周年記念・特別研究シンポジウム

「ポスト国民国家時代における民族――希薄化する概念、実体化する集団」

実施日　令和6年6月29日
代表者　宇田川妙子（特別研究運営会議議長）
参加者総数　68名

みんぱく創設50周年記念・特別研究国際シンポジウム

「国家とエスニシティ：ポストナショナリズム時代の関係」

実施日　令和6年11月30日、12月1日
研究代表者　野林厚志
参加者総数　83名

みんぱく創設50周年記念・特別研究ワークショップ

「フォーラムとしての博物館の刷新：ポストナショナリズムの時代に博物館はどのような対話を試みるのか」

実施日　令和6年10月5日
研究代表者　鈴木 紀
参加者総数　30名

フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進（人間文化研究機構　機関拠点型基幹研究プロジェクト）

機関拠点型研究「フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進」は、研究者コミュニティならびに文化の担い手である現地社会との協働による国際的な共同研究の推進により、100万点以上に及ぶ本館所蔵の学術資源をオンライン上で広く一般に発信する多言語型「人類文化アーカイブズ」を構築し、文化人類学・民族学及びその関連分野の学術資源の継承と国際的な共有財産化を可能とする教育研究活動の中核基盤拠点を形成することを目的としています。3年目となる令和6年度は、基盤型プロジェクト4件、推進型プロジェクト5件、合わせて9件のプロジェクトを実施しました。また、研究の国際化を推進するための国際発信プログラムにおいて、みんぱく創設50周年記念国際シンポジウム「デジタル人文知が作られるとき」を開催しました。なお、この事業は人間文化研究機構機関拠点型基幹研究プロジェクトとして位置づけられています。

推進しているプロジェクト

1. 基盤型

標本資料、映像・音響資料、文献資料等本館所蔵の文化資源及び関連した学術資料を中心としたアーカイブズ構築に重点をおくとともに、それを活用した共同研究を一貫して展開します。

2. 推進型

既存のデータベースやプラットフォームを活用し構築するデータベースにもとづく国際共同研究、国際シンポジウム、展示等を通した成果発信を展開する、もしくは新たなアーカイブズ構築に重点をおきます。

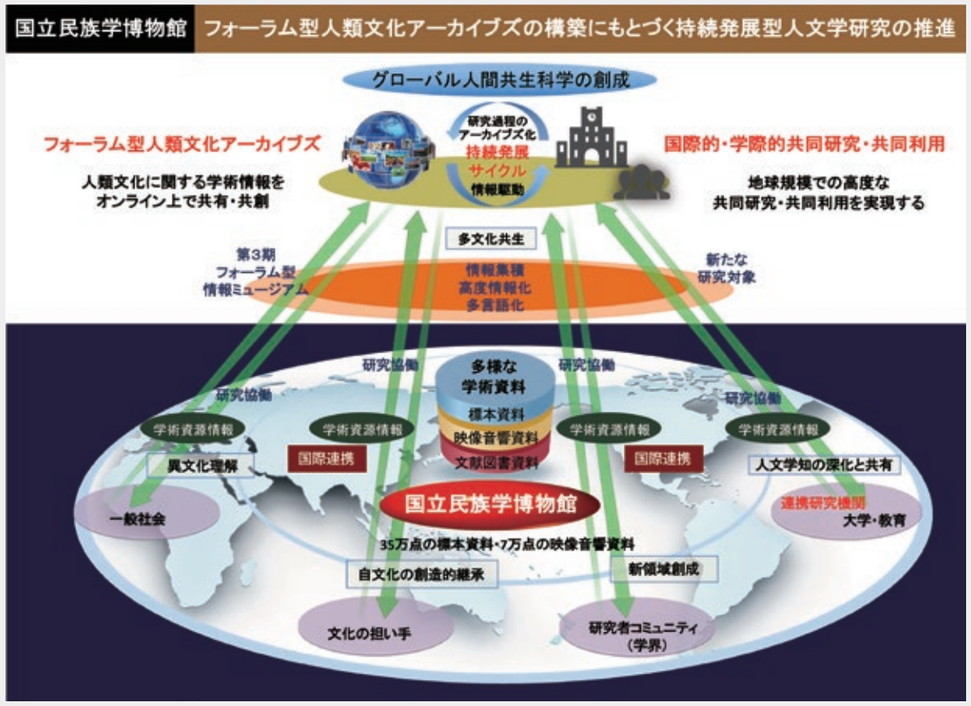
「フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進」研究プロジェクト

代表者	プロジェクト名	区分	期間
平野智佳子	オーストラリア先住民の物質文化に関する研究―民博収蔵の学術資料を中心に	基盤型	令和4年4月～令和8年3月
丹羽典生	日本人の太平洋収集に関する総合的アーカイブスの構築	基盤型	令和4年4月～令和8年3月
中川 理	ヨーロッパ地域文化展示のフォーラム型人類文化アーカイブズの構築	基盤型	令和6年4月～令和10年3月
小野林太郎	海域東南アジア・オセアニアの樹皮布とバスケタリー	基盤型	令和6年4月～令和10年3月
黒田賢治	西アジア北東部の文化動態と物質文化をめぐる超域的研究	推進型	令和6年4月～令和8年3月
諸 昭喜	「朝鮮半島の装い」データベースに関するドキュメンテーション研究	推進型	令和6年4月～令和8年3月
宮前知佐子	民博所蔵北欧の日用品に関するデータベース構築 ―デザインの観点から	推進型	令和6年4月～令和7年3月、令和8年4月～令和9年3月
岡田恵美	インド・ミャンマー国境周辺の山岳民族文化に関するフォーラム型超域的研究	推進型	令和7年4月～令和9年3月
三尾 稔	故中根千枝東京大学名誉教授写真デジタルデータアーカイブズの作成	推進型	令和7年4月～令和9年3月

みんぱく創設50周年記念国際シンポジウム「デジタル人文知が作られるとき」（2024年11月17日開催）

みんぱく創設50周年記念国際シンポジウムの様子
人文学知の蓄積をデジタル化し、国際的共有、次世代継承および新たな研究の開拓を進めるための方法論が議論された

ペルーでの国際ワークショップの様子
現地の民芸職人が参加し、民俗芸能やモノづくりの現状について意見交換を行った



「フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進」の全体構造

ウェブサイト上で公開中のデータベースの例

「奄美大島の踊りと歌と祭り」
地域ごとの芸能や祭りの多様性について、映像で探求できる

「稲作調査団タイ写真データベース」
本館所蔵の写真資料が地域や民族など多様な項目から検索可能

共同利用型研究

共同研究

文化人類学・民族学および関連分野の特定のテーマについて館内外の専門家が共同でおこなう研究です。
令和6年度は、館外より国立大学80名、公立大学12名、私立大学85名、民間機関など43名の専門家とともに研究をおこないました。

令和6年度　共同研究課題　○印は館外研究者による実施課題

【一般】

	研究代表者	研究課題	研究期間	共同研究員数 館内	国立大学	公立大学	私立大学	民間機関など	総計
		課題1：新領域開拓型							
○	白井千晶	現代アジアにおける生殖テクノロジーと養育――ジェンダーとリプロダクションの学際的比較研究	令和3年10月1日～令和7年3月31日	2	4	1	4	2	13
○	土井清美	観光における不確実性の再定位	令和3年10月1日～令和7年3月31日	1	3	0	8	0	12
○	竹沢尚一郎	被傷性の人類学／人間学	令和3年10月1日～令和7年3月31日	1	4	0	6	4	15
○	山内由理子	ミックスをめぐる帰属と差異化の比較民族誌――オセアニアの先住民を中心に	令和4年10月1日～令和7年3月31日	1	4	2	4	1	12
	中川 理	グローバル資本主義における多様な論理の接合――学際的アプローチ	令和4年10月1日～令和7年3月31日	1	5	3	3	0	12
○	池谷和信	アジアの狩猟採集民の移動と生業――多様な環境適応の人類史	令和4年10月1日～令和7年3月31日	3	10	1	1	3	18
○	岩谷洋史	フォト・エスノグラフィーの実践に関する方法論の検討	令和5年10月1日～令和8年3月31日	3	4	1	8	0	16
○	津村文彦	呪術的偶然性と共同性の人類学的研究	令和6年10月1日～令和9年3月31日	2	4	1	5	0	12
○	櫻間瑞希	非欧米圏ポピュラー音楽の実践に見る新たな文化動態	令和6年10月1日～令和9年3月31日	3	3	0	4	3	13
	卯田宗平	日本人にとって鳥とは何か――鳥の文化誌をめぐるT字型学際共同研究	令和6年10月1日～令和9年3月31日	5	4	0	3	6	18
	上羽陽子	バスケタリーと線状物に関する人類学的研究――植物生態と民族技術に着目して	令和6年10月1日～令和9年3月31日	4	4	0	3	4	15
	山中由里子	知的境界領域における生態想像力の往還	令和6年10月1日～令和9年3月31日	3	4	0	4	2	13
		課題2：学術資料共同利用型	計	29	53	9	53	25	169
○	植村幸生	民博所蔵東洋音楽学会資料に基づく日本民俗音楽の再構成と再活性化	令和3年10月1日～令和7年3月31日	3	4	2	0	1	10
	丹羽典生	日本人による太平洋の民族誌的コレクション形成と活用に関する研究――国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションを中心に	令和3年10月1日～令和7年3月31日	4	2	1	6	0	13
○	落合雪野	国立民族学博物館所蔵木製品標本資料にもとづく森林資源利用史の研究――桶と樽に着目して	令和4年10月1日～令和7年3月31日	5	3	0	1	11	20
	飯田 卓	国立民族学博物館の資料収集活動に関する研究――創設後50年のレビュー	令和5年10月1日～令和8年3月31日	6	1	0	5	0	12
○	井上敏昭	国立民族学博物館所蔵の北方デネー（北方アサバスカン）関連資料の活用に関する研究	令和6年10月1日～令和9年3月31日	3	5	0	3	4	15
○	中生勝美	民博アーカイブに基づく人類学史研究	令和6年10月1日～令和9年3月31日	2	3	0	4	0	9
			計	23	18	3	19	16	79

【若手】

		課題1：新領域開拓型							
○	宮坂慎司	伝承のかたちに「触れる」プロジェクト――「3Dプリント×伝統素材・技法」のアプローチから	令和3年10月1日～令和7年3月31日	1	3	0	4	2	10
○	中尾世治	アフリカの人びとはいかに「アフリカ史」を語ってきたか――アフリカのローカルな歴史からみた「アフリカ史学史」	令和5年10月1日～令和8年3月31日	1	5	0	4	0	10
		課題2：学術資料共同利用型	計	2	8	0	8	2	20
○	土井冬樹	日本人によるオセアニアコレクションの形成とモノの来歴――東大資料とみんぱくコレクションを中心に	令和6年10月1日～令和9年3月31日	2	1	0	5	0	8
			計	2	1	0	5	0	8
			合計	56	80	12	85	43	276

共同研究会の公開

平成16年度より共同研究会の一部が、一般向けに公開されています。（令和6年度実績は以下のとおりです。）

開催日	研究会名	場所	参加者数
令和6年12月6日（金）	非欧米圏ポピュラー音楽の実践に見る新たな文化動態	国立民族学博物館講堂・特別展会場	80
令和6年12月14日（土）～12月15日（日）	国立民族学博物館所蔵木製品標本資料にもとづく森林資源利用史の研究――桶と樽に着目して	国立民族学博物館第5セミナー室	56

外来研究員　令和6年度

本館は、大学共同利用機関として、国内外の大学や研究機関に所属する研究者または若手の博士課程修了者もしくは単位取得退学者等で、一定期間、本館での研究活動を希望する者を、外来研究員として受け入れています。受入にあたっては、本館教員が受入担当教員になります。一定の条件を満たす外来研究員には、研究代表者として本館から科学研究費助成事業への応募を認めています。令和6年度は、16の国・地域から22人の外国籍を含む67人の研究者を外来研究員として受け入れました。

特別共同利用研究員　令和6年度

本館は、大学共同利用機関として全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該学生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れています。特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて、本館の指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するとともに、本館に設置されている、総合研究大学院大学人類文化研究コースの教育プログラムに一部参加することができます。令和6年度は、国立大学より2名、私立大学より2名を受け入れました。

科学研究費助成事業による研究プロジェクト

科学研究費助成事業は、我が国の学術を振興するため、人文・社会科学から自然科学まであらゆる分野における優れた独創的・先駆的な研究を格段に発展させることを目的とする研究助成費で、大学などの研究者または研究者グループが自発的に計画する基礎的研究のうち、学術研究の動向に即して特に重要なものを取り上げ、研究費の助成をするものです。

令和7年度採択課題

研究種目		研究代表者	研究課題	配分額（千円）
新規	学術変革領域研究（A）（公募研究）	鈴木 紀	現代マヤの焼畑農耕の持続可能性に関する文化人類学的研究	2,600
新規	学術変革領域研究（A）（公募研究）	市川 彰	古代オアハカ太平洋岸における干ばつ期から雨量回復期の民衆の植生利用と土地利用	2,470
			計2件	5,070
継続	国際共同研究加速基金（国際先導研究）	菊澤律子	「時空言語学」の創成：地理と歴史を融合した言語の変化と発展への新たなアプローチ	110,500
			計1件	110,500
継続	国際共同研究加速基金（海外連携研究）	MATTHEWS, Peter J.	アジア、オセアニア、マダガスカルにおけるデンプン食料源としての大型サトイモ科植物	6,370
			計1件	6,370
継続	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）	市川 彰	メソアメリカ古典期社会の衰退期を生きた民衆の技術・交易・戦争	11,960
	※国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)は、令和5年度～令和7年度配分額		計1件	11,960
新規	基盤研究（S）	西尾哲夫	言語と音楽の関係をめぐる〈物語性〉発現メカニズムの解明と人類史的展開モデルの構築	43,420
			計1件	43,420
継続	基盤研究（A）	小野林太郎	サピエンスによる海域アジアへの初期拡散と島嶼適応に関する学際的総合研究	6,630
継続	基盤研究（A）	野林厚志	民族誌アーカイブズとフィールド調査の接合による植民地初期台湾の先住民族社会の探究	8,060
継続	基盤研究（A）	小長谷有紀	モンゴル遊牧論の再構築―家畜の<探索>に着目して	4,160
新規	基盤研究（A）	日高真吾	土蔵や学校を利用した文化財収蔵施設における保存環境システムの構築	4,160
新規	基盤研究（A）	岸上伸啓	環太平洋地域の先住民社会におけるアート制作と社会変化―脱植民地化を中心に	8,710
			計5件	31,720
継続	基盤研究（B）	吉田憲司	社会的危機下のアフリカにおける文化の「創発」に関する人類学的研究	1,560
継続	基盤研究（B）	出口正之	文化遺産的価値と会計的価値の衝突に関する博物館学と会計学との共同研究	3,770
継続	基盤研究（B）	吉岡 乾	ドマーキ語の文法記述	1,430
継続	基盤研究（B）	寺村裕史	シルクロード都市における宗教の伝播と受容・変容に関する考古学的研究	4,160
継続	基盤研究（B）	末森 薫	薄明宗教空間における多色視覚芸術の再現と認知に関する科学的研究	5,200
継続	基盤研究（B）	市川 彰	気候変動と民衆の生活変化からみるメソアメリカ古典期社会の衰退に関する学際的研究	1,430
継続	基盤研究（B）	長野泰彦	チベット・ポン教禳災儀礼の構造と儀礼具の意味に関する国際共同調査研究	6,370
継続	基盤研究（B）	山中由里子	想像界の還流―境界領域における生態想像力の往還をめぐる比較文化史的研究	5,070
新規	基盤研究（B）	松本雄一	先史アンデスにおける初期複合的社会の生成から崩壊に至る歴史的過程の研究	6,240
新規	基盤研究（B）	卯田宗平	絶滅危機に瀕する長鳴き鶏の飼養文化: 動物利用の普遍性の解明と最適継承ルートの共創	1,820
新規	基盤研究（B）	石山 俊	アーカイブ画像と情報技術を活用した亜熱帯オアシス農村の生業変容に関する比較研究	6,110
			計11件	43,160
継続	基盤研究（C）	宍倉正也	Transborder Humanityの研究: 旅をする「からゆきさん」の音楽を中心に	1,040
継続	基盤研究（C）	高科真紀	沖縄祭祀写真資料を対象とした〈伝統的文化表現〉の保護と記録のアクセス	1,170
継続	基盤研究（C）	平井京之介	水俣病運動アーカイブズの形成と活用、行為主体性に関する民族誌的研究	1,040
継続	基盤研究（C）	中川 理	ズッキーニのサプライ・チェーンに関する人類学的研究	1,170
継続	基盤研究（C）	岡田恵美	インド北東部ナガのポリフォニー歌唱文化をめぐるフォーラム型音楽民族学研究	1,170
継続	基盤研究（C）	川瀬 慈	アフリカにおける映像民族誌制作と活用に基づく文化保護モデルの構築	1,040
継続	基盤研究（C）	奈良雅史	台湾のムスリム・コミュニティにおける排他性と包括性をめぐる人類学的研究	1,040
継続	基盤研究（C）	冨田（甲斐）更紗	聴覚障害学生のセルフ・アドボカシー向上のための日本手話習得支援に関する研究	1,430
新規	基盤研究（C）	工藤さくら	ネパールにおけるイスラームと仏教の人類学的研究: 融和・包摂・不関心	1,560
	国際・若手支援強化枠			
新規	基盤研究（C）	黒田賢治	近代日本宗教史におけるイスラームの定位と言説基盤の史的展開をめぐる実証的基礎研究	520
新規	基盤研究（C）	鈴木英明	「アフリカ人」とは誰か： 19世紀インド洋西海域の救出奴隷を事例に	1,040
新規	基盤研究（C）	齋藤 晃	スペイン領南米の辺境ミッションにおける民族の衰退と再生―洗礼簿に基づく史的再構成	1,170
新規	基盤研究（C）	松尾瑞穂	民族／人種の系譜的想像力と自然化の論理―南アジアの白人「混血」集団から	1,300
新規	基盤研究（C）	市野進一郎	マダガスカルにおける救荒食の調理技術とその起源の解明	1,430
			計14件	16,120

研究種目		研究代表者	研究課題	配分額（千円）
継続	若手研究	平野智佳子	オーストラリア遊動社会における飲酒トラブルの発生と解消に関する人類学的研究	910
継続	若手研究	宮前知佐子	用の美の継承―デザインミュージアムを想定したアーカイブ・展示手法の開発	–
継続	若手研究	佐藤美奈子	多言語社会ブータン王国におけるノンフォーマル教育研究	1,170
継続	若手研究	邱 君妮	協働的な博物館活動に関する研究―オランダ「共有の文化遺産」概念の検証	910
継続	若手研究	山崎暢子	現代ウガンダ北西部の都市開発と社会的ステレオタイプの再生産・克服に関する研究	650
継続	若手研究	久岡加枝	Z・バリアシュヴィリ（1871-1933）の作品研究：グルジア語のオペラと宗教音楽を中心に	1,950
継続	若手研究	松岡とも子	日韓国交正常化（1965）と日韓美術交流―植民地解放後の変化に着目して	780
継続	若手研究	康 陽球	ベトナム南中部ラグライ人による社会主義改革の受容：モラリティと審美性に注目して	260
継続	若手研究	藤井真一	民族紛争下のソロモン諸島におけるキリバス系移民の避難実態と生存戦略の研究	1,560
新規	若手研究	松井 梓	モザンビーク北部における植民地統治と解放闘争をめぐる別様の経験の提示	1,040
			計10件	9,230
継続	挑戦的研究（開拓）	伊藤敦規	ソースコミュニティに優しい民族誌資料公表モデルの構築に向けた博物館人類学的研究	4,030
			計1件	4,030
継続	挑戦的研究（萌芽）	池谷和信	ゲノム解析と民族誌の統合からみたブタ遊牧の形成	2,210
			計1件	2,210
継続	研究活動スタート支援	古沢ゆりあ	西洋で収集・展示された近代日本・アジアのキリスト教美術に関する調査研究	1,170
			計1件	1,170
新規	研究成果公開促進費	黒田賢治	近代日本におけるイスラームの転回: 漂泊する知の考古学	1,200
			計1件	1,200
継続	特別研究員奨励費	池邉智基	スマホ時代のセネガルにおける新たなリテラシー能力とウォロフ語の言説空間	1,560
継続	特別研究員奨励費	柳沢英輔	人類学とアートの協働に関する実践的研究：音響民族誌の制作を事例に	1,300
新規	特別研究員奨励費	仲尾友貴恵	東アフリカにおける社会福祉の発展と帝国内移民：インド系ムスリム移民と近代性の関係	1,430
新規	特別研究員奨励費	谷 憲一	イラン・アザーリーを事例としたエスニック・アイデンティティとナショナリズムの研究	1,040
			計4件	5,330
			総計54件	291,490

寄附金等による研究活動　令和6年度

寄附金の名称	研究代表者	寄附者	受入額（千円）
岡本尚子特任助教研究助成金 （公益財団法人財団 稲盛研究助成（人文・社会科学系））	岡本尚子	公益財団法人 稲盛財団	1,000
順益台湾原住民博物館研究賛助金	野林厚志	順益台湾原住民博物館　館長 游 浩乙	2,800
西尾哲夫特定教授研究助成金 （2024年度三菱財団人文科学研究助成）	西尾哲夫	公益財団法人 三菱財団	2,760
MATTHEWS, Peter J.教授研究助成金 （2024年度三菱財団人文科学研究助成）	MATTHEWS, Peter J.	公益財団法人 三菱財団	3,410
押鐘浩之研究助成金 （2024年度一般研究助成）	押鐘浩之	公益財団法人 発酵研究所	2,918
			計5件　12,888

文化資源関連事業・情報関連事業

文化資源プロジェクト・情報プロジェクト

「文化資源プロジェクト・情報プロジェクト」は、本館専任教員の提案に基づき、本館あるいは大学等関連諸機関が所有する学術資源の体系化および情報化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、機関として実施する研究プロジェクトです。
「文化資源プロジェクト」では、調査・収集分野、資料管理分野、展示分野、博物館社会連携分野の4分野のプロジェクトを実施しています。また、「情報プロジェクト」では、制作・収集分野、情報化分野の2分野のプロジェクトを実施しています。

令和7年度文化資源プロジェクト一覧

分野	提案者	プロジェクト名
展示	日高真吾	みんぱく創設50周年記念特別展「民具のミカタ博覧会――見つけて、みつめて、知恵の素」
展示	小野林太郎	特別展「舟と人類―アジア・オセアニアの海の暮らし」
展示	寺村裕史	特別展「シルクロードの商人(あきんど)語り―サマルカンドの遺跡と遥かなるユーラシア交流―」（仮題）
展示	相島葉月	みんぱく創設50周年記念企画展「点と線の美学――アラビア書道の軌跡」
展示	野林厚志	黒潮アートプロジェクト ―企画展「台湾原住民族アートの今」（仮題）
展示	南真木人	企画展「ドルボ――西北ネパールのチベット文化圏（仮題）」の開催
展示	菊澤律子	2022年秋の特別展示『*Homō loquēns*「しゃべるヒト」ことばの不思議を科学する』の部分巡回展（京都府立医科大学医学科との共同企画）の開催
展示	卯田宗平	青森県弘前市との協同による弘前ねぶたの保存伝承プロジェクト
展示	奈良雅史	「中国地域の文化」展示の更新
展示	齋藤玲子	特別展「サルンクル――沙流川流域のアイヌのくらし」（仮題）のための準備
展示	丹羽典生	企画展「トレス海峡と大島襄二調査隊の50年」（仮題）の準備
展示	山中由里子	国際連携展示「驚異と怪異――想像界の生きものたち」（中国巡回予備調査）
博物館社会連携	野口泰弥	貸出用学習キットみんぱっく「極北を生きる カナダ・イヌイットのアノラックとダッフルコート」の引き継ぎ
博物館社会連携	福岡正太	貸出用学習キットみんぱっく「ジャワ島の装い」の運用継続
博物館社会連携	上羽陽子	貸出用学習キットみんぱっく「あるく、ウメサオタダオ展」の運用継続

令和7年度情報プロジェクト一覧

分野	提案者	プロジェクト名
制作・収集	寺村裕史	みんぱく映像民族誌「サマルカンドの遺跡とシルクロード交易（仮題）」の制作
制作・収集	齋藤玲子	みんぱく映像民族誌「サルンクル――沙流川に生きるアイヌのくらし（仮題）」の制作
制作・収集	伊藤敦規	マルチメディア番組「（仮題）2012年研究公演『ホピの踊りと音楽』とホピの人々による衣装解説」の制作

文化資源計画事業・情報計画事業

「文化資源計画事業・情報計画事業」は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、継続性の高い事業、または計画的に実施する事業です。
「文化資源計画事業」では、資料関連分野、展示分野、博物館社会連携分野の3分野の事業を実施しています。また、「情報計画事業」では、テーマ別映像制作、記録映像制作分野、展示情報化分野、寄贈受入提案分野の4分野の事業を実施しています。

令和7年度文化資源計画事業一覧

分野	実施責任者	事業名
資料関連	末森 薫	標本資料の撮影等業務
資料関連	企画課長	研究資料整理・情報化及び利用管理業務【標本資料関連】
資料関連	末森 薫	研究資料整理・情報化及び利用管理業務【データベース関連】
資料関連	日高真吾	有形文化資源の保存・管理システム構築
資料関連	末森 薫	標本資料の収集（個別収集）
資料関連	末森 薫	標本資料の収集（テーマ別収集）
博物館社会連携	上羽陽子	ボランティア活動支援
博物館社会連携	上羽陽子	ワークショップの実施ならびにワークシートの運用
博物館社会連携	齋藤玲子	カムイノミ及び「アイヌ古式舞踊」演舞の実施
博物館社会連携	岡田恵美	博物館社会連携事業強化プロジェクト
博物館社会連携	信田敏宏	知的障害者の博物館活用に関する実践的研究――学習ワークショップ「みんぱくSama-Sama塾」

令和7年度情報計画事業一覧

分野	実施主体	事業名
テーマ別映像制作	三尾 稔	みんぱく映像民族誌「ウダイブルのディワーリー祭礼の持続と変容」（仮）の制作
展示情報化分野	松尾瑞穂	南アジア展示更新に伴う新たな演示資料の電子ガイド・プログラムの作成（中国語・韓国語版）
記録映像制作分野	情報運営会議	特別展・企画展・コレクション展示パノラマ映像制作
記録映像制作分野	情報運営会議	研究公演記録映像制作
記録映像制作分野	情報運営会議	可搬型ビデオテークシステム運用
寄贈受入提案分野	情報運営会議	映像音響資料及び研究アーカイブズ資料の寄贈受入

（全て令和7年4月1日現在）

第4期 人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、令和4年度より6カ年にわたり、機構の根幹をなす人間文化に関する基盤的・学際的研究として「基幹研究プロジェクト」を実施し、学術ネットワークの拡大や新分野創出等によって、大学共同利用機関としての使命を果たすための機能強化につなげます。

広領域連携型：「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」

みんぱくユニット「地域文化の効果的な活用モデルの構築」　代表者：日高真吾

現在、日本列島では、多発する自然災害、あるいは地域の変貌によって、地域文化の持続可能性や多様性が危機的な状況にあります。また、2020年以降の新型コロナウイルス感染症の蔓延は、新たな生活様式を取り入れた社会の構築を求める契機となりました。こうした状況は、私たちにこれまでにはない、新たな社会の創発を促していく必要性があることを示しています。
一方で、新たに生み出していこうとする社会では、これまでの日々の営みで育まれてきた地域の知恵や歴史が凝縮された地域文化を取り入れなければ、自然災害や社会変化などに適応可能な持続性や多様性を有する、本当の意味での豊かさを創発することはできません。
そこで、本研究では、地域文化をテーマとした国内の地域博物館、台湾の地域博物館の活動、さらには世界各地における地域文化の継承活動を丹念に調査し、効果的な地域文化の活用モデルの構築を図ることを目指します。

令和6年能登半島地震の被災文化財の救出活動

ネットワーク型：グローバル地域研究推進事業

グローバル地域研究プログラム　総括班 代表者：三尾 稔

政治、経済、社会、文化などあらゆる面でグローバル化が進む現代世界にあって、既存の地域枠組みにのみ注目してその基本的性格や構造を解明する研究は成り立たなくなっています。一方、新たな形でのナショナリズムの高揚や地域の固有性の再発見や再創造といった動きも活発化し、これがグローバル化のあり方にも大きな影響を与えています。また、このような動態の下で、コロニアル/ポストコロニアル時代とは異なる空間連関が生じ、従来とは異なる地域性も生じてきています。
このような状況を踏まえ、人間文化研究機構は、これまで主にポストコロニアルな世界認識の下で想像（創造）された地域それぞれの固有性を内在的・本質的に明らかにすることに注力していた地域研究を刷新し、グローバル秩序の構築と変容のメカニズムを、諸地域の比較と関連性という視点から明らかにする「グローバル地域研究プログラム」を実施することとなりました。このプログラムの下では、以下の4つの拠点ネットワーク型地域研究プロジェクトが展開しており、いずれのプロジェクトにも国立民族学博物館に設置された拠点が参加し研究を推進しています。

グローバル地中海地域研究プロジェクト　国立民族学博物館拠点（中心拠点）代表者：西尾哲夫

本プロジェクトは、国立民族学博物館を中心に、国内の他の三つの拠点と共同して研究を進めています。本プロジェクトの主な目的は二つあります。第一は、地中海を取り囲む諸国を、北は「ヨーロッパ」、南は「中東・北アフリカ」として分断する既存の地域研究の枠組みを脱構築し、「地中海地域」としての歴史的・文化的な関係性を包括的にとらえるアプローチを探求することです。第二は、地中海を介し西はアメリカ大陸、南は東アフリカやインド洋、東は中央アジアまで広がる大航海時代以降のグローバルな人・モノ・知識の往来について、文学、歴史学及び文化人類学を主要なアプローチとし、相互連携しながら共同研究を進めていくことです。超地域的かつ学際的アプローチを援用して考察することで、新しい地域研究の構築を目指します。
国立民族学博物館拠点の目的は、人とモノが移動することにより特定の空間を切り取られて「地域」として想起される契機や仕組みを考察することです。17世紀以降の科学技術の発展により、人とモノ、情報のモビリティは格段に向上し、グローバル化現象をもたらしました。文化人類学と歴史学では、移民や交易に関する研究の蓄積はあるものの、移動が地域を形成する役割は十分に検証されていません。陸海空におけるモビリティを包括的にとらえることで、時間や空間が領域化する様相を動態的にとらえる方法論を探求します。

環インド洋地域研究プロジェクト　国立民族学博物館拠点（中心拠点）代表者：三尾 稔

本プロジェクトでは、インド洋とこれに接する陸域に焦点を合わせ、そこを行き交うヒトやモノ、情報、カネ、文化、信仰の移動の拡がりが、この世界内外でのさまざまな関係性の生成・発展・蓄積あるいは消滅に関わってきた動態を解明します。これを通じ、環インド洋世界という新たな地域設定とその研究に資する分析手法を確立し、地域研究に新たな展望を開くことを目ざしています。より具体的には、①移動の連関性と連続性、②文学と思想の混交性と創造性、③開発と環境、医療の持続性、④平和的共生の可能性の四つのテーマを設け、中心拠点である国立民族学博物館拠点をはじめとする四つの拠点がそれぞれのテーマを担って研究を実施しています。
国立民族学博物館拠点は、「移動の連関性と連続性」の解明をテーマとします。具体的には、インド洋世界の重要な構成要素であるヒトやモノ、情報、カネ、文化、信仰の移動や、移動が促す多様な位相（社会、文化、個人）における変容に着目し、それらが相互にどのように作用し、何を育んできたのかという連関性と、移動の時空間的な連続性の解明を二千年の時間幅で行います。この問題に人類学、歴史学、建築学、物質文化研究などの知見を糾合させ接近することで、インド洋世界の実態を移動という観点から明らかにするとともに、その分析手法を確立して、本プロジェクト全体の研究目的達成に貢献します。

海域アジア・オセアニア研究プロジェクト　国立民族学博物館拠点（中心拠点）代表者：小野林太郎

国立民族学博物館拠点を中心とする四つの拠点ネットワークでプロジェクトを推進しています。本プロジェクトは、陸域に基づく国家や東アジアや東南アジア、オセアニアといった従来の地域概念によって分断されがちな地域研究ではなく、海域という視点を強調することで、東アジアや東南アジア、さらにはオセアニアといった複数の地域を同時に対象とする新たな地域研究の実践を目ざします。本研究は「海域世界における島嶼環境と人類による文化・社会間の変容動態の探究」という共通目的の下に、（1）対象地域を「オーストロネシア」語族圏としての基層文化的な共通性が根底にあることを認識しつつ、（2）現代における海域アジアからオセアニアにおけるヒトやモノ、情報をめぐる越境的な動き・ネットワークに関わる総合的な把握を試みます。
この海域における開発の波は、人びとの生業を大きく変化させ、多くの文化遺産の破壊にも直結しているほか、地域社会の伝統や文化変容にも大きな影響を与えつつあります。国立民族学博物館拠点は、島嶼世界で進むインフラ開発や資源開発に対し、その影響を直に受ける（1）農業や漁業といった生業活動の変化やその動態に注目するほか、（2）開発による影響を直接的に受ける遺跡や文化遺産の保護や観光資源化の問題、（3）グローバル化や開発への抵抗としても活発化する文化復興やアイデンティティの再認識化といった動きについて、その歴史的動態と現状を明らかにします。

東ユーラシア研究プロジェクト　国立民族学博物館拠点 代表者：島村一平

東ユーラシアとは、中国とロシア及び隣接するモンゴル・朝鮮半島・日本を中心とし、そこに隣接または関与する広域というゆるやかな地域概念です。プロジェクトの目的は巨大国家中国とロシアを抱える東ユーラシアの存在がグローバル世界に及ぼす影響力を、文化の衝突とウェルビーイング（幸福感）という視点で捉えることにあります。政策や国際関係、経済のグローバル化を踏まえながらも、中国・ロシアおよびその隣接国家に暮らす人びとに焦点をあて、彼らの宗教、文化、経済、政治などの活動が、いかなる文化衝突を引き起こし、また共生を生み出したのか、近現代史的背景を踏まえながら展開の実態を明らかにします。
国立民族学博物館拠点は本プロジェクトの中心拠点である東北大学拠点を支えつつ、宗教とサブカルチャーをテーマに研究を行っています。すなわち、これらが政治経済秩序とは異なる局面でグローバルな関係性の中でいかに人びとの希望を創り出しているかという点に焦点を当てています。とりわけ旧社会主義圏では、圏外に拠点を置く制度宗教や旧西側由来のニューエイジ思想、サブカルチャーといった「グローバルな文化」との接続が90年代以降であったという点に特徴があります。これに関しては、中国でも改革開放以降に外来の宗教や文化と接続しているという点において共通しています。そこで本拠点では、ポスト社会主義圏を中心とした東ユーラシアにおけるこうしたグローバル化のタイムラグを背景に、当該地域の人びとが、新たに生み出された文化によっていかなる幸福感を得、また文化衝突を生じさせているのかを明らかにします。

人間文化研究機構 共創先導プロジェクト

人間文化研究機構では、令和4年度より6カ年にわたり、機構のミッション達成を先導し、機構内外の多様な組織や人びととの共創による共同研究である「共創先導プロジェクト」を推進し、研究展開を促進します。
みんぱくが担当しているのは、以下のプロジェクトです。

共創促進研究

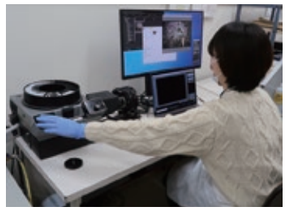
コミュニケーション共生科学の創成　代表者：菊澤律子

本館と国立国語研究所とが主たる拠点となり、協働してコミュニケーション共生科学に向けた研究を推進します。本館では、手話言語学部門の研究の蓄積を活かした手話言語等の視覚型コミュニケーション、音声および触覚などを用いた非視覚型のコミュニケーション、そして言語に関わる脳の活動に関する基礎および実践的研究を進めます。国立国語研究所では、社会言語学、コーパス言語学、日本語教育を基軸とし、対人コミュニケーションに見られる社会問題、とりわけ個々人の社会的特性を取り巻く問題に取り組む問題解決指向型の調査研究を実施し、社会問題に関する言語問題の構造を的確に捉えます。両機関ならびにその関連他分野、すなわち、社会学、文化人類学、認知心理学、認知科学、社会心理学、医学、脳科学、情報工学など広領域にわたる外部研究者と連携することにより、多様な言語と異なるコミュニケーションモードを含めた、社会におけるコミュニケーション問題の解決と共生に至る道筋を探ることを目指します。
（HP: scom.languagescience.jp）

特別展「*Homō loquēns*「しゃべるヒト」～ことばの不思議を科学する～」

学術知デジタルライブラリの構築　代表者：飯田 卓

本プロジェクトは、日本の研究者・研究機関が世界諸地域で撮影・収録した写真・動画・音声資料の統合的なデジタル化・データベース化のプラットフォームを築き、学術資料の共有と利用を図るものです。国立民族学博物館拠点では、国立情報学研究所とともに構築してきた写真画像・映像等のデータベース・システムを適宜改善しつつ活用し、国内の大学・研究機関に属する研究者を対象として、写真画像、映像等のデジタル化・データベース化の作業を支援します。この事業を通じて、当該研究者・研究機関の研究の進捗を図るとともに、そのうちの公開可能なデータを国際的に共有化することで、分野の別を超えたオープン・サイエンスの基盤を構築することを目指しています。また、音声・映像等の統合的データベース・システムを開発する国立国語研究所拠点とも連携し、構築したデータベースを用いた分野横断的な共同研究を推進します。


国立民族学博物館におけるフィルム写真デジタル化の作業

各個研究 令和7年度各個研究課題

人類基礎理論研究部

市野進一郎	1)民族学博物館における研究活動等の評価・IRに関する研究 2)マダガスカルにおける霊長類と地域住民の関係に関する研究
岡田恵美	1)インド北東部ナガのポリフォニー歌唱文化に関するフォーラム型音楽民族学研究 2)インド・ミャンマー国境周辺の山岳民族文化に関するフォーラム型超域的研究 3)ベンガル地方の吟遊行者バウルと絵語りポトゥアに関する研究
川瀬 慈	エスノフィクションの理論と実践の研究
菊澤律子	国際先導プロジェクト「時空言語学の創成: 地理と歴史を融合した言語の変化と発展への新たなアプローチ」の推進
末森 薫	薄明宗教空間に描かれた多色視覚芸術と燃焼光が視覚認知に与える影響の検証
高科真紀	〈伝統的文化表現〉に配慮した沖縄祭祀資料のアクセス体制の整備
平野智佳子	オーストラリア先住民アボリジニの問題飲酒に関する人類学的研究
廣瀬浩二郎	「バリア・フリー」に関する人類学的研究
丸川雄三	連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
宮前知佐子	–
山中由里子	驚異と怪異の比較文明論: 想像界と自然界の相関
吉岡 乾	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

超域フィールド科学研究部

浅田直規	ルーマニア孤児のエージェンシーと「発達し続ける存在」としての人間
飯田 卓	舟とうつわに関する博物館人類学的研究
市川 彰	古代メソアメリカ文明における環境変化と人類の適応に関する考古学的研究
太田心平	韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性
樫永真佐夫	ベトナムとラオスにおける黒タイ文化
韓 敏	社会、歴史と象徴に関する人類学的研究
丹羽典生	デジタル返還に関する実践人類学的研究
藤井真一	平和と暴力に関する人類学研究
松尾瑞穂	民族の自然化の論理の探求―アジアのユーレイジアンを中心に
南真木人	西ネパール高地ドルポ地域の社会変容

人類文明誌研究部

池邉智基	セネガルにおける文書と口頭伝承の相互作用に関する人類学的研究
伊藤敦規	フォーラム実現指数による「フォーラムとしてのミュージアム」実績の再考
上羽陽子	手工芸文化の比較研究
齋藤 晃	ボリビア低地のモホス地方におけるイエズス会ミッションと民族生成
島村一平	モンゴルの宗教現象に関する人類学的研究
鈴木昴太	日本の民俗芸能に関する社会史的研究
平井京之介	水俣病運動アーカイブズの形成と活用、行為主体性に関する民族誌的研究
福岡正太	映像音響メディアが音楽芸能に与える影響に関する研究
藤本透子	中央ユーラシア草原地帯におけるカザフの宗教動態に関する人類学的研究
松本雄一	チャビン現象とワリ帝国: アンデス文明の展開における二つの画期をめぐる考古学的研究

グローバル現象研究部

相島葉月	現代エジプトにおける美と身体文化
卯田宗平	鳥と人類とのかかわり
黒田賢治	日本―中東間の相互表象をめぐる研究
鈴木英明	移動から見たインド洋西海域世界
諸 昭喜	物から見る韓国社会の変容とジェンダーⅡ: リプロダクションとケアの周辺から
中川 理	資本主義のエスノグラフィ
野林厚志	民族が国家に与える影響に関する人類学的研究
信田敏宏	1)マレーシアの民族性に関する人類学的研究 2)知的障害とウェルビーイングに関する人類学的研究
三尾 稔	インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究
八木百合子	アンデス地域の宗教文化の動態に関する研究

学術資源研究開発センター

マーク・ウィンチェスター	アイヌによる近現代の文学や芸術、政治や言論についての歴史的・理論的研究
小野林太郎	海域アジア・オセアニアにおける島嶼移住・生業・文化遺産の研究
河西瑛里子	オルタナティヴ・スピリチュアリティと宗教についての文化人類学的研究
齋藤玲子	アイヌ民族のアート制作と日本の社会変化
寺村裕史	シルクロード都市における宗教の伝播と受容・変容に関する考古学的研究
奈良雅史	台湾のムスリム・コミュニティにおける排他性と包摂性をめぐる人類学的研究
野口泰弥	環北太平洋狩猟採集社会における威信財と社会的複雑性に関する研究
日髙真吾	地域文化の効果的な活用モデルの構築
三島禎子	移動現象の多元的意義に関する文化人類学的研究―アフリカ商業移民の労働倫理から―

個人の受賞

氏名	受賞年月日	賞名
島村一平	令和5年8月1日(令和6年6月18日叙勲式)	モンゴル国「北極星勲章」
日髙真吾	令和6年6月23日	第17回文化財保存修復学会学会賞
野口泰弥	令和7年3月14日	「北極域研究加速プロジェクト(ArCSⅡ)最終成果報告会」若手ポスター賞

研究成果の公開 ※開催場所の表記がないものは、本館で開催。

本館では、館長リーダーシップ経費「研究成果公開プログラム」をはじめ、シンポジウムや研究フォーラム、国際研究集会への派遣など、研究成果の公開を積極的に支援しています。その他の外部資金等を含め、令和6年度は下記のような成果公開を実施しました。なお、特別研究関連については、8～9頁に掲載しています。

学術講演会

先端的な研究活動を取りあげ、その成果を社会に積極的に還元するとともに、文化人類学・民族学を通じての異文化理解と、広く本館が学術研究機関であることの認識を一般市民に深めてもらうことを目的として、東京と大阪において学術講演会を実施しています。

みんぱく公開講演会

民族×アートの現在――美をめぐる政治のゆくえ

令和6年11月8日

講師　柳沢史明、鈴木 紀、吉田憲司
司会　松尾瑞穂
会場　日経ホール
参加者総数　431名

不安の時代――若き人びとの心のゆくえ

令和7年3月21日

講師　鈴木晃仁、奥田若菜、阿毛香絵、諸 昭喜
司会　飯田 卓
会場　オーバルホール
参加者総数　350名

ワークショップ・シンポジウム等

みんぱく創設50周年記念国際シンポジウム

「海域からみる人類の文化遺産」

令和6年5月11日、12日

研究代表者　小野林太郎
参加者総数　737名

座談会

みんぱく創設50周年記念企画展「客家と日本―華僑華人がつむぐ、もうひとつの東アジア関係史」

座談会「日本の客家、企画展を語る」

令和6年9月5日

研究代表者　奈良雅史
参加者総数　126名

国際シンポジウム

「フィジー言語地理情報システムと関連研究および今後の展開」

令和6年9月12日

研究代表者　菊澤律子
参加者総数　113名

みんぱく創設50周年記念国際シンポジウム

「アート、人類学、ミュージアム―その過去、現在、そして未来」

令和7年3月1日

研究代表者　吉田憲司
参加者総数　390名

みんぱく創設50周年記念国際シンポジウム

「22世紀のミュージアム ―未来のコミュニケーション空間を創造する―」

令和7年3月8日、9日

研究代表者　宮前知佐子
参加者総数　439名

ワークショップ

「メキシコ動物木彫の世界：カラフルな民衆芸術はいかに発展してきたか」

令和7年3月16日

研究代表者　鈴木 紀
参加者総数　78名

研究成果の出版 令和6年度

館内の出版物

国立民族学博物館研究報告

『国立民族学博物館研究報告』は、民族学、文化人類学の発展に寄与するために、国立民族学博物館が刊行する研究誌です。この目的に即して、民族学、人類学および関連諸科学に関する論文、書評論文、研究ノート、資料を掲載しています。年4回出版。

48巻3号 **論文**
Crisis de la década de 1690 en el Moxos jesuítico: Una reconstrucción histórica con base en un epistolario misionero de la Biblioteca Nacional del Perú　Akira Saito
研究ノート
台湾における先住民身分の動向―「原住民身分法」の違憲判決に関する予備的考察　野林厚志
日本初のマッカ訪問者をめぐる予備的考察―1907年の中島裁之の世界旅行と「メッカ」視察談を手がかりに　黒田賢治
48巻4号 **論文**
Performing, Teaching, and Listening to Ragas in Hindustani Classical Music　Emi Okada
民族誌博物館のデコロナイゼーション ―ヨーロッパと日本の博物館コレクションの形成をふまえて　飯田 卓
49巻1号 **特集**
文化人類学を自然化する
序論―人類学を自然化する四つのやりかた　中川 敏
人類学にとっての自然化―回顧と展望　浜本 満
探索と推論の限界心理学―アフォーダンス理論と関連性理論の架橋　飯田 卓
他者と同じように行為すること ―クンの養育者=乳幼児間相互行為の分析から　高田 明
裏切りの快楽―芸術が生まれるとき　中川 敏
資料
ペティス・ド・ラ・クロワ版『シンドバード航海記』より　第二航海の翻訳と注解　西尾哲夫・岡本尚子
49巻2号 **論文**
Techniques for Preserving and Improving Long-crowing Chickens in Japan: A Case Study of the Tomaru in Niigata Prefecture and Koeyoshi in Akita Prefecture　Shuhei Uda
生者と死者の媒介者(ミディウム)―現代のイギリスにおける霊媒と霊たちとの交流　河西瑛里子

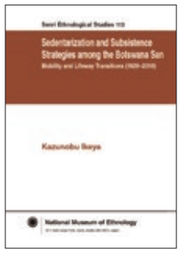
Senri Ethnological Studies (SES)

『Senri Ethnological Studies』は、各個研究、共同研究、機関研究などの成果を国外に向けて発表することを目的とし、特定の民族、地域、またはテーマに関する著作もしくは論文集、文献解題目録などを掲載しています。出版は不定期。

no.113　*Sedentarization and Subsistence Strategies among the Botswana San: Mobility and Lifeway Transitions (1929–2010)*, Kazunobu Ikeya

Senri Ethnological Reports (SER)

『国立民族学博物館調査報告(Senri Ethnological Reports)』は、各個研究、共同研究、機関研究などの成果をできるかぎり速やかに報告することを目的とし、特定の民族、地域、テーマに関する調査研究成果のうち、予備的報告を必要とするもの、文献目録、資料集成など、資料的性格をもつものを掲載しています。使用言語は、日本語・外国語を問いません。出版は不定期。



157号　トトニカパン記　八杉佳穂著

TRAJECTORIA

TRAJECTORIA is an international multimedia peer-reviewed journal situated at the intersection of anthropology, heritage studies, museum studies, and the arts. It is published annually online by the National Museum of Ethnology.

Vol. 6　**Film**
SCHAAF Suzanne, The Memory of Glitch
Special Theme
Landscape Memories, Archival Ecologies
DOUGLAS Lee, Introduction: Histories of Extraction, Toxicity, and River Ghosts on and Beyond the Page
CAZENAVE Alice, Parallel Archives: Photographic Silver & Its Landscapes
DE ALMEIDA Beatriz, A Complicated Portrait of the Portuguese River Paiva: A Photo-Essay
BORDOLI Andrea, Remediating Visual Extractivism and the Geological Archive: Multimodal Perspectives from Subarctic Québec
Carte Blanche
VAN LANCKER Laurent, Why ? As an Intention Scheme

民博通信Online

『民博通信Online』は、本館において実施している個々の研究プロジェクトについて、その学術的な特色や独創的な点、導きだされた成果などを、研究者や一般の方々にわかりやすく発信する雑誌です。2019年度からオンライン化され、電子ブックになりました。

No.10　**Final report**
基幹研究　徳之島・奄美大島の芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムのデータベースを基盤とした芸能研究の推進とその成果としてのマルチメディア番組及び展示の制作・公開
徳之島・奄美大島の芸能と祭りに関する民博人類文化アーカイブズプロジェクトの概要　笹原亮二
基幹研究　第一次東南アジア稲作民族文化綜合調査のアーカイブズ構築―タイの写真資料を中心に
写真資料を軸とする総合的なアーカイブズの構築―情報整理と追跡調査　平井京之介
基幹研究　台湾研究デジタル統合アーカイブの構築
デジタルアーカイブ大国台湾で考える人類学研究　野林厚志
特別研究　不確実性の時代における家族の潜勢力―モビリティ、テクノロジー、身体
変動的な家族の調整／再調整をとらえる　森 明子
特別研究　コロナ禍に対するローカルな対処としての「文化の免疫系」に関する比較研究
人類はコロナ禍にいかに対処してきたか　島村一平
共同研究　戦争・帝国主義と食の変容―食と国家の関係を再考する
人びとを国民化する装置としての食　宇田川妙子
共同研究　海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み
「逆さ読み」からみる日本―人類学 back home への試み　片岡 樹
共同研究　環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究―人類史的視点から
北太平洋地域の先住民社会を比較研究する試み　岸上伸啓
共同研究　月経をめぐる国際開発の影響の比較研究―ジェンダーおよび医療化の視点から
月経する身体の人類学にむけて　新本万里子
共同研究　不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う―モノ、制度、身体のからみあい
不確定な世界を場所というできごととして書く　森 明子
共同研究　「描かれた動物」の人類学―動物×ヒトの生成変化に着目して
動物との間に生成する情動を描きだす　山口未花子

No.11　**Start up**
基幹研究　ヨーロッパ地域文化展示のフォーラム型人類文化アーカイブズの構築
ヨーロッパ展示から市民参加型フォーラムをつくる　中川 理
基幹研究　海域東南アジア・オセアニアの樹皮布とバスケタリー
海域アジア・オセアニアのバスケタリーと樹皮布文化　小野林太郎
基幹研究　西アジア北東部の文化動態と物質文化をめぐる超域的研究
展示区分の垣根を越えて　黒田賢治
基幹研究　「朝鮮半島の装い」データベースに関するドキュメンテーション研究
女性と子供の衣装を中心に見た韓国の民俗衣服　諸 昭喜
基幹研究　民博所蔵北欧の日用品に関するデータベース構築―デザインの観点から
国境を越えた文化資源データの連携・活用を目指して　宮前知佐子
共同研究　日本人にとって島とは何か―島の文化誌をめぐるT字型学際共同研究
日本列島における鳥の文化誌研究　卯田宗平
共同研究　知的境界領域における生態想像力の往還
異なる宇宙観の接点でどのような知の駆け引きが起こるのか　山中由里子
共同研究　呪術的偶然性と共同性の人類学的研究
不確実な世界の、頼りない呪術　津村文彦
共同研究　非欧米圏ポピュラー音楽の実践に見る新たな文化動態
音楽実践から見る現代世界の文化動態　櫻間瑞希
共同研究　国立民族学博物館所蔵の北方デネー(北方アサバスカン)関連資料の活用に関する研究
先住民社会との博物館資料の共同利用を目指して　井上敏昭
共同研究　民博アーカイブに基づく人類学史研究
人類学者の社会史　中生勝美
共同研究　日本人によるオセアニアコレクションの形成とモノの来歴―東大資料とみんぱくコレクションを中心に
みんぱくに眠る資料に目覚めを　土井冬樹
研究動向
英国の民族誌映画祭に関する動向調査　川瀬 慈

本館助成による館外出版物

島世界の葬墓制―琉球・海域アジア・オセアニア　小野林太郎編　雄山閣
ナラティヴ・ポリティクスとしての異人論―不寛容時代の〈他者〉をめぐる物語　山 泰幸・西尾哲夫編　臨川書店
鵜飼の日本史―野生と権力、表象をめぐる1500年　卯田宗平編　昭和堂
モノからみた宗教の世界　八木百合子編　春風社
脱観光化の人類学―かわりゆく観光と社会のゆくえ　東賢太朗・福井栄二郎・奈良雅史編　ミネルヴァ書房
その空間を統治するのはだれか―フロンティア空間の人類学　佐川 徹・岡野英之・大澤隆将・池谷和信編　ナカニシヤ出版
寄食という生き方―埒外の政治・経済の人類学　内藤直樹・森 明子編　昭和堂

みんぱく映像民族誌

『みんぱく映像民族誌』は、研究・教育目的での視聴用として製作したDVDシリーズです。フィールドワークにもとづいて撮影した映像作品を収録しています。全国の大学や研究機関、国公立の図書館等に配付しています。

令和6年度作成
第53集　ラージャスターンのガンゴール祭礼　三尾 稔
第54集　奄美大島の八月踊り　笹原亮二
第55集　つながりを生きる ―東京のエチオピア移民―　川瀬 慈

学術情報リポジトリ

「みんぱくリポジトリ」は、NII(国立情報学研究所)のJAIRO Cloud(共用リポジトリサービス)を利用して、館内出版物「Senri Ethnological Studies」、「国立民族学博物館調査報告(Senri Ethnological Reports)」、「国立民族学博物館研究報告」「国立民族学博物館研究報告別冊」、「民博通信」、「国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム」、電子ジャーナル「TRAJECTORIA」等に加えて、外部で出版されたもののうち、利用許諾が取得できた論文を随時公開しています。その数は、令和6年度末時点で約6,406コンテンツで、論文のダウンロード利用数は月平均約83,429件です。

博物館の共同利用

共同利用型科学分析室

設置目的

本館は、民族資料や文化財、博物館資料を対象に、一次的な非破壊分析や材質分析がおこなえる非破壊分析・材質分析装置システムを所有しています。 共同利用型科学分析室は、非破壊分析・材質分析装置システムを文化人類学やその周辺領域の学問分野において、さまざまな組織や研究者がより積極的に活用でき、科学的研究に基づいた共同利用の促進に資することを目的として、平成29年12月に設置されました。

所有機器

X線透視CTスキャン装置
三次元積層造型機（3Dプリンター）
三次元形状計測装置
熱分解ガスクロマトグラフ
イオンクロマトグラフ
蛍光X線分析装置
恒温恒湿槽
フーリエ変換赤外分光光度計（FT-IR）
デジタルマイクロスコープ

X線透視CTスキャン装置

三次元積層造型機（3Dプリンター）

利用実績

令和4年度

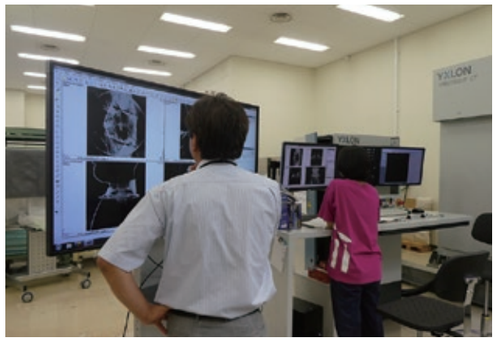
申請件数	利用機関
17件	神戸大学、大津市市民部文化財保護課、川崎市民ミュージアム、大豊町教育委員会、気仙沼市教育委員会、村上市教育委員会、旭山保存会、大徳寺、能生白山神社、株式会社 三ツワフロンテック、株式会社 岡墨光堂、株式会社ワードスプリング等

令和5年度

申請件数	利用機関
20件	東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター、サマルカンド考古学研究所、奈良県立民俗博物館、半田市立博物館、延岡城・内藤記念博物館、木地屋民俗資料館、気仙沼市教育委員会、村上市教育委員会、大徳寺、無量寺、能生白山神社、株式会社 岡墨光堂等

令和6年度

申請件数	利用機関
18件	東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター、京都芸術大学、奈良県立民俗博物館、川崎市市民ミュージアム、大津市教育委員会、香美町教育委員会、気仙沼市教育委員会、村上市教育委員会、大徳寺、無量寺、能生白山神社、名和神社、株式会社 岡墨光堂等


X線CTスキャン装置による調査

蛍光X線分析装置による調査

利用について

非破壊分析・材質分析装置システムの利用については、企画課標本資料係で受け付けています。

企画課標本資料係
TEL　06-6878-8392
FAX　06-6878-8242
Mail　hyohons@minpaku.ac.jp

図書室

利用案内

開室日時	月・火、木曜日～土曜日　10:00～17:00（入室は16:30まで）
休室日	日曜日、祝日、水曜日、博物館休館日および年末年始（12月28日～1月4日）
利用資格	どなたでもご利用できます。貸出は18歳以上の方が可能です。（図書室利用証が必要） 資料によっては利用できない場合があります。 事前にお問合せください。 Webサイト　https://www.minpaku.ac.jp/sharing/library

1. 教育・研究支援

本館が所蔵する文献図書資料は、専門性の高い蔵書構成となっています。 マイクロフィルムリーダーを設置し、カラーコピー機での複写サービスもおこなっています。 カウンターには司書資格を有するスタッフが常駐し、大学共同利用機関として、教育・研究活動の支援体制を整えています。

2. 文献図書資料の国立情報学研究所を介した目録情報公開を促進

令和6年度は世界21言語の図書を目録登録し、633,629冊が検索可能となりました。

3. 社会貢献など

一般利用者も館外貸出利用ができます。 令和6年度の一般利用者の登録者数は214名、館外貸出冊数は1,101冊です。

4. 研究支援など

本館が所蔵する文献図書資料は、インターネット環境があればパソコンや携帯電話を使って、どこからでも検索することができます。

図書室カウンター

雑誌コーナー

民族学研究アーカイブズ

本館では創設以来、文化人類学・民族学研究者の研究ノートや原稿、フィールドで作成した映像・録音記録などさまざまな資料を集積してきました。 これらを活用すべく情報運営会議の下に設置された「アーカイブズ部会」により、令和6年度も継続してアーカイブズ資料の実態調査と目録作成及びデジタル化をおこないました。 今後も作業を継続し、順次公開していくことを目指します。

●青木文教（あおき ぶんきょう）アーカイブ
●石毛直道（いしげ なおみち）アーカイブ
●泉 靖一（いずみ せいいち）アーカイブ
●稲田浩二（いなだ こうじ）日本昔話関連アーカイブ
●岩本公夫（いわもと きみお）アーカイブ
●内田勘（うちだ いさお）・1930年代台湾および日本を中心とした東アジア文化アーカイブ
●梅棹忠夫（うめさお ただお）アーカイブズ
●江口一久（えぐち かずひさ）・アフリカ-アジアの言語アーカイブ
●大内青琥（おおうち せいこ）アーカイブ
●沖 守弘（おき もりひろ）・インド民族文化資料アーカイブ
●桂米之助（かつら よねのすけ）アーカイブ
●鹿野忠雄（かの ただお）アーカイブ
●木内信敬（きうち のぶゆき）「ジプシー(ロマ)研究」アーカイブ
●菊沢季生（きくざわ すえお）アーカイブ
●北村 甫（きたむら はじめ）アーカイブ
●栗田靖之・別府春海（くりた やすゆき・べふ はるみ）・日本人の贈答アーカイブ
●小林保祥（こばやし やすよし）・台湾南部原住民族アーカイブ
●篠田統（しのだ おさむ）アーカイブ
●杉浦健一（すぎうら けんいち）アーカイブ
●西北ネパール学術探検隊1958年データカードアーカイブ
●土方久功（ひじかた ひさかつ）アーカイブ
●馬淵東一（まぶち とういち）アーカイブ
●丸谷彰（まるたに あきら）・朽木村針畑生活資料アーカイブ
●「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ

保存箱に収納されたアーカイブズ資料

資料 令和６年度

資料の利用

本館の所蔵する民族学資料は、館内外における諸分野の研究や大学教育、他の博物館への貸付などを通し、社会還元されています。
民族学資料の利用に関するお問い合わせは、「民族学資料共同利用窓口」で受け付けています。
令和6年度受付件数は、237件でした。

民族学資料共同利用窓口
TEL・FAX　06-6878-8213
URL　https://www.minpaku.ac.jp/sharing/guide/helpdesk

1. 標本資料の貸付件数　10件　貸付資料数　472点

上記のうち、展覧会の展示点数全体における本館資料の貸付件数の占める割合が50パーセントを超えるものは、下記のとおりです。

貸付先	展覧会名	貸付資料	展覧会期間	貸付点数／全体の展示点数・貸付資料が展示資料に占める割合
米子市美術館	「佐藤健寿展 奇界/世界」展	ガーナの棺桶他	令和6年4月7日～5月26日	9点/9点（100%）
大分市美術館	「佐藤健寿展 奇界/世界」展	ガーナの棺桶他	令和6年6月28日～9月23日	9点/9点（100%）
国立アイヌ民族博物館	第9回特別展示「驚異と怪異――想像界の生きものたち」	本館特別展「驚異と怪異――想像界の生きものたち」関連資料	令和6年9月14日～11月17日	328点/520点（63%）

2. 標本資料の特別利用（原板使用・写真撮影・熟覧）件数 71件 1,527点

上記のうち、大学関係12件（調査研究、著作の参考資料としての写真利用など）、
博物館関係12件（調査研究、展示に係る写真利用など）

3. 映像・音響資料の利用件数 142件　貸出点数 10,854点

上記のうち、大学関係54件 1,792点、研究用（個人・研究会など）33件 1,668点

4. 文献図書資料

文献複写受付 4,116件（うち来室複写 3,214件）文献複写依頼 348件
現物貸借受付 363件　現物貸借依頼 207件
特別利用（原板使用・写真撮影）9件（うち調査研究、著作への写真使用など6件）

標本資料収蔵庫

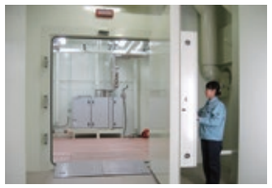
5. 研究アーカイブズ資料

閲覧件数 49件　特別利用 13件

資料の保存

本館では、研究や展示などに使用する各種の学術資料を収集しています。資料の大半をしめる標本資料には、虫やカビの害を受けやすい有機素材が多く使われているため、資料の防虫・殺虫対策には特別な注意を払っています。たとえば海外からの新着資料には、収集地と日本の自然環境や生態系が大きく異なるため、燻蒸庫で薬剤による殺虫・殺菌処理をおこなっています。一方、日本国内に入ってから加害された資料には、できるかぎり薬剤を用いない殺虫処理法をおこなうなど、収集地や加害環境、材質の違いを考慮に入れながら殺虫処理法を使い分けています。このような本館特有の防虫・殺虫対策を有効に実施するため、平成19年に、大型のウォーク・イン高低温処理庫を新設するとともに、既存の燻蒸庫を、二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫に改修しました。また、燻蒸使用後の薬剤処理を目的に、触媒燃焼式の除害装置を設置することで、「ひとに、ものに、自然にやさしい」資料管理を実現しています。これらのシステムは、本館が、他大学などの研究者とともに資料の有効活用を支えるためにおこなっている保存科学研究の成果のひとつでもあります。

ウォーク・イン高低温処理庫


二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫

大学生・教員のためのみんぱく活用

研究の成果、展示物や所蔵資料、文化・学術情報、施設などを大学の教育と研究にひろく活用していただくための制度を設けています。
Webサイト　https://www.minpaku.ac.jp/teacher/university/manual

授業での展示場利用

教員同伴のもと、大学の講義・セミナーおよび公式行事（例:新入生オリエンテーション等）で展示場を利用する場合、事前申請をすると観覧料が無料となります。
見学に教員が同行しない場合、または専門学校及び専修学校（専門課程に限る）の授業で見学する場合、シラバス等、授業内容が明記された資料を提示すると、割引料金で観覧できます。

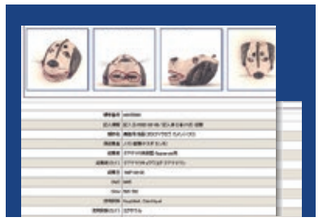
展示場の利用

図書室の利用

文化人類学・民族学を中心とした文献図書資料が約70万点。
大学の授業等での図書室見学も受けつけています。

標本資料の利用

世界中から収集した標本資料が約34万7千点以上。
授業や研究で、みんぱくが収蔵する標本資料の調査や撮影、画像の利用ができます。


データベースの利用

映像・音響資料の利用

みんぱくが制作したものなど、世界各地の映像・音響資料が約7万3千点。
ビデオテークのうち632番組はDVDで視聴できます。また、オンライン授業で活用いただけるよう一部の映像資料については、インターネットを利用したストリーミング配信をしています。

データベースの利用

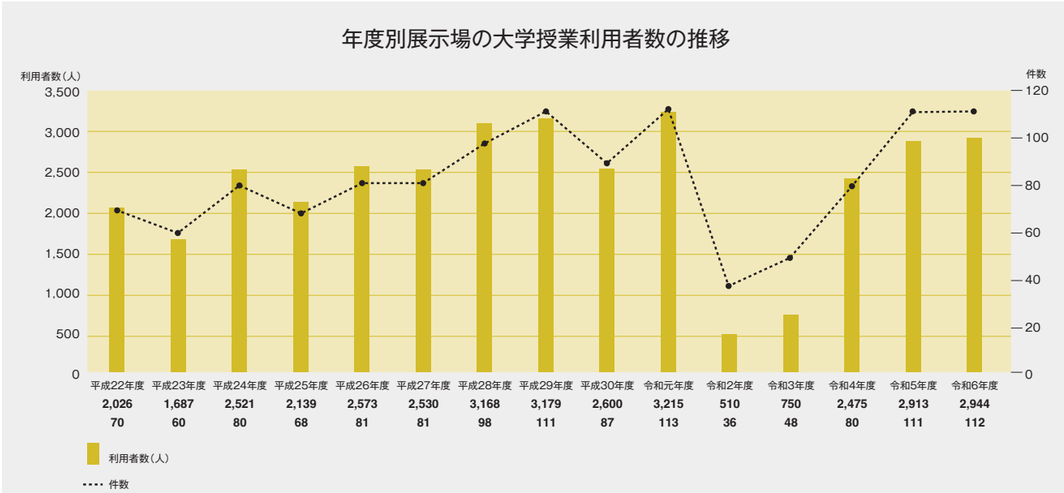
所蔵資料や、研究資料・成果の膨大な情報が自由に検索できます。

若手研究者の育成

若手研究者による本館における共同利用を促進するため、「みんぱく若手研究者奨励セミナー」を開催しています。セミナーでは、本館教員による基調講演のほか、参加者による発表と討論を2日間の日程でおこないます。また、若手を対象とした各種共同利用制度や施設紹介の一環として図書館や収蔵庫見学も実施します。

みんぱく若手研究者奨励セミナー

令和6年度利用実績　件数112件　利用者数2,944名（無料利用）



大学・短大等からの団体入館者件数
摂南大学（216）関西学院大学（143）追手門学院大学（87）大阪学院大学（63）大阪成蹊大学（72）大阪大学（192）大阪電気通信大学（83）金沢星稜大学（79）関西大学（214）京都芸術大学（66）京都橘大学（318）甲南大学（121）神戸芸術工科大学（132）東北学院大学（64）梅花女子大学（141）龍谷大学（267）
（以上、国内1団体50人以上）などから、85団体3,426人

展示

展示の理念と構成

みんぱくにおける展示は、文化人類学・民族学とその関連諸分野の研究成果を多様なメディアを通じて社会に公開し、世界各地の文化についての認識を深めるとともに、文化の違いを超えた相互理解の場を提供することを目的としています。 展示は、本館展示と特別展示・企画展示で構成されます。 本館展示では、世界の文化の多様性と共通性についての広い理解が得られるよう、常設的な展示をおこなっています。 一方、特別展示・企画展示は、特定のテーマについて深く掘り下げた内容の展示を、期間を限って、年に数回開催するものです。

本館展示

本館展示は、地域展示と通文化展示から構成されています。

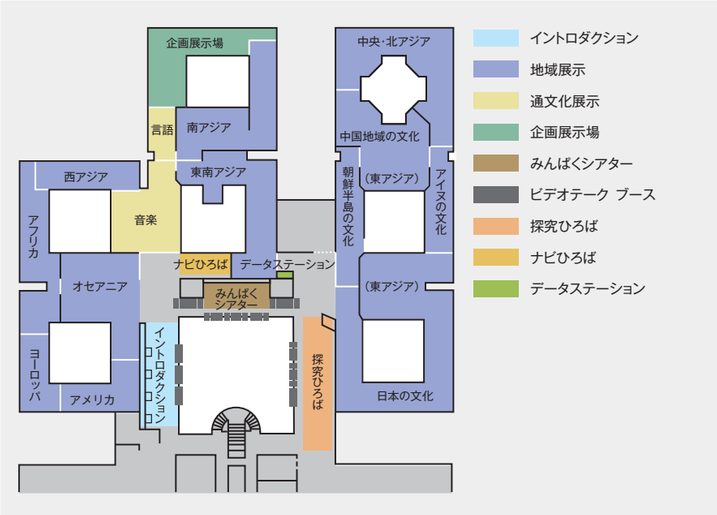
地域展示では、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地域に分け、オセアニアを出発して東回りに世界を一周し、最後に日本にたどり着く構成をとっています。 日本の文化を世界各地の文化との関連の中で理解できるように配慮したものです。 みんぱくでは、創設以来、世界の民族文化に優劣はなく、すべて等しい価値をもつという認識にもとづいて、展示をつくり上げてきました。 それぞれの文化に見られる違いは、人類の営みの豊かな多様性を示すものとして展示されています。 また、世界の人びとの暮らしがよくわかるように、衣食住などの生活用品を中心とした展示になっているのも特徴のひとつです。

一方、通文化展示とは、地域単位でなく、特定のジャンルを取り上げて広く世界の民族文化を通覧する展示で、現在は音楽と言語についての展示を常設しています。

本館展示は、1977年の開館以来、世界の社会・文化的状況や学問のありかたなどが大きく変化していることにともない、2008年度から展示の新構築を進め、2016年度に完了しました。 研究の進展に応じて引き続き展示を更新していきます。

本館展示場内に設けている企画展示場では、期間を限って、現代的な問題や最先端の研究成果など個別のテーマを取り上げた展示をおこなっています。この企画展示場は、国内外の大学等の最新の研究動向を迅速に展示に結びつける、共同利用展示場としても活用しています。

みんぱくでは、情報機器を活用した展示を積極的に展開しています。 一つ目は「ビデオテーク」です。 開館時に「映像情報自動送出装置」として世界に先がけて開発したもので、映像を通じて、本館展示場内で紹介されている民族の生活や、その民族が生み出したモノが実際に用いられている様子を確認することができます。 現在は860本の映像番組を自分で選択して視聴することができます。 2022年度からは、より映像に没入できるよう、みんぱくシアターを新設しました。 大型スクリーンによるダイナミックな映像を大人数でご覧いただけるブースと、大型モニターにより少人数で快適に視聴いただけるブースを設置しました。 二つ目は「みんぱく電子ガイド」です。 1999年に世界ではじめての映像と音声による携帯型の展示解説装置として開発したもので、展示資料が、どのような場所で、どのような人びとによって、どのように使われているかなど、さまざまな情報を得ることができます。 この電子ガイドは2020年に、館内施設の案内やビデオテークとの連携などの新しい機能を持ったシステムとして生まれ変わりました。 スマートフォンを用いて、手元に表示される展示場の地図で自分の位置を確認しながら、展示資料の解説映像をみることができます。 また、二次元バーコードによってビデオテークと連携し、解説映像を視聴した展示資料に関連したビデオテーク番組が自動的に紹介されます。 これらの映像は多言語対応を進めており、ビデオテークでは860番組の中から561番組、電子ガイドコンテンツでは330番組について、英語字幕データを基に、7言語の機械翻訳を行いました。その結果、9言語での視聴が可能となっています。



みんぱく電子ガイド

展示場内の施設や展示物を館内地図により案内するとともに、資料が、どのような場所で、どのような人びとによって、どのように使われているかを、解説した映像や情報を見ることができます。 また、日本語、英語、中国語をはじめ、9言語に対応しています。

地域展示

地域展示では、世界を大きくオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、東アジアの9地域に分けています。
（各展示場名横の数字は展示場面積）

オセアニア 660㎡

移動と拡散　海での暮らし　島での暮らし
外部世界との接触　先住民のアイデンティティ表現

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在しています。 そこには、発達した航海術をもち、根栽農耕を営む人びとが暮らしてきました。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示しています。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介します。

アメリカ 320㎡

出会う　食べる　着る
祈る　創る

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られます。 人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできました。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していきました。 ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の資源に現代的価値を見いだそうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介しています。

ヨーロッパ 250㎡

生業と一年　宗教・信仰
産業化とともに　変動するヨーロッパ

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植しました。 現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、彼らの文化も社会の一部となりつつあります。 ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示しています。

アフリカ 500㎡

歴史を掘り起こす　都市に集う　働く
装う　祈る

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきました。 私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかなりません。 この展示では、人びとの「歴史を掘り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを、「都市に集う」「働く」「装う」「祈る」という4つの側面に分けて紹介しています。 この展示が、私たちと同時代に生きるアフリカの人びとへの共感を育むものであることを願っています。

西アジア
310㎡

信仰
砂漠のくらし
パレスチナ・ディアスポラ
グローバル文化としてのコーヒー
音文化とポップカルチャー

中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク（日出ずる地）とよび、マグリブ（日没する地）とよばれる北アフリカと深い関係を保ってきました。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきました。多くの住民はムスリムですが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもあります。地球規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを、信仰、砂漠の生活、女性の装い、音楽と芸能をテーマに紹介します。

南アジア 600㎡

宗教文化―伝統と多様性　生態となりわい
都市の大衆文化　染織の伝統と現代　躍動する南アジア

南アジア地域は、北部の山岳地帯から西はアラビア海沿岸、東はベンガル湾沿岸にいたるさまざまな自然環境のもと、多様な宗教や文化、生活様式をもつ人びとが共存しあう知恵を育んできました。経済発展が著しい現代においても、その知恵は保たれています。この展示では、宗教文化や生業・工芸の多様性、都市を中心とした活気あふれる大衆文化、またグローバル化のなかで花ひらく染織文化のすがたを紹介します。

東南アジア 730㎡

生業　村の日常　都市の風景　芸能と娯楽

森と海に囲まれた東南アジア。熱帯・亜熱帯の気候にくらす人びとは、早朝の涼しい時間から働きはじめ、40度近くに達する日中は屋内で昼寝などをして暑さをしのぎます。夕方、スコールが通り過ぎた後は、少し暑さが和らぎ、人びとは買い物や農作業に出かけます。日が落ちて涼しくなると、友人や家族と屋台に出かけたり、演劇を見たりして余暇を楽しみます。本展示場では、「東南アジアの1日」をテーマに、その多彩な民族文化を紹介します。

中央・北アジア 710㎡

自然との共生　社会主義の時代　中央アジア
モンゴル　シベリア・極北

中央・北アジアは、ユーラシア大陸の北東部を占める広大な地域です。古くから東西南北をむすぶ交渉路としての役割を担い、多様な民族が行き交ってきました。20世紀に社会主義を経験した後、市場経済に移行し、グローバル化の波にさらされながら伝統を再評価する動きがみられます。「自然との共生」「社会主義の時代」というふたつの共通テーマをふまえて、「中央アジア」「モンゴル」「シベリア・極北」の3つの地域に生きる人びとの今を紹介します。

東アジア　朝鮮半島の文化 330㎡

住の文化　精神世界　食の文化　衣の文化
知の文化　あそびの文化

朝鮮半島の人びとは、外部の民族から影響を受けつつ、独自の文化を育んできました。有史以前は東シベリアの諸民族から、その後は中国から取り入れた文化要素を、独自のものに再編し、世界に例を見ないほど高度に統合された文化を獲得してきました。近代には日本に植民地支配され、独立後にはふたつの分断国家として急速な近代化を進めました。そして現代には、積極的に世界に進出する韓国人や、コリア系の海外生活者の姿も見られます。こうした文化の歴史的な重なりや躍動性を、精神世界、衣食住、あそびと知をテーマに紹介します。

東アジア　中国地域の文化 660㎡

生業　民族楽器　チワン族の高床式住居　装い　工芸
台湾原住民族　宗教と文字　華僑・華人　継承される伝統中国

中国地域では、広大な面積と高低差のある地形がうみだす多様な自然環境のもと、さまざまな民族文化が育まれてきました。人口の多くを占める漢族は平野部を中心に居住しています。少数民族はおもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住し、台湾には先住のオーストロネシア系民族が居住しています。また、世界各地に、華僑・華人がくらしています。多様な生活環境から生みだされたさまざまな民族の文化を、歴史や地域性をふまえ、生業、装い、楽器、住居、工芸、宗教と文字、漢族の婚礼や祖先祭祀、台湾の原住民族、華僑・華人をテーマに紹介します。

東アジア　アイヌの文化 270㎡

アイヌとは　カムイと自然　現代そして未来

アイヌは、北海道を中心に日本列島北部とその周辺にくらし、寒冷な自然環境のもとで独自の文化をはぐくんできた先住民族です。江戸時代に幕府による支配が始まり、明治時代に同化がすすめられると、アイヌは差別を受け生活に困るようになりました。しかし近年、日本政府はその歴史的事実を認め、アイヌ民族を尊重した政策に取り組みはじめました。ここでは、伝統を継承しつつ、あらたな文化を創造する人びとの姿を紹介します。

東アジア　日本の文化 1,460㎡

祭りと芸能　日々のくらし　沖縄のくらし
多みんぞくニホン

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれています。こうした環境のなかで、隣接する諸文化と影響しあいながら、さまざまな地域文化を展開してきました。また、近年では多くの外国人が私たちの隣人として生活をともにしています。ここでは、「祭りと芸能」、「日々のくらし」、「沖縄のくらし」、「多みんぞくニホン」という4つの角度から、日本文化の様相を展示しています。

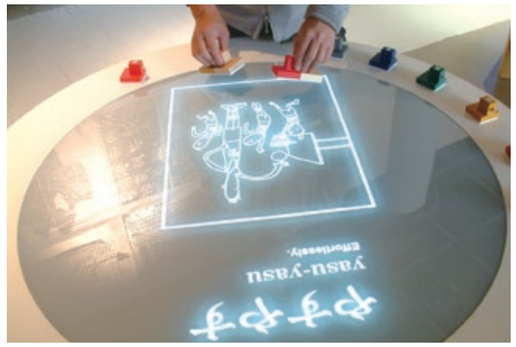
通文化展示

音楽 550㎡

太鼓　荒ぶる音　**ゴング**　伝え交わる音
チャルメラ　演じる音　**ギター**　歴史の中の音

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきました。また、神仏や精霊など見ることのできない存在と交わってきました。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の例を通して考えます。

言語 170㎡



言葉を構成する要素　**言語の多様性**　**世界の文字**

人びとが出会い触れあうところではコミュニケーションが不可欠で、さまざまな情報が常に何らかの方法でやりとりされています。なかでも音声や身ぶりを媒体とすることばは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を空間や世代を超えて伝えることができます。文化の多様性を反映する存在であると同時に、人間のもつ認知能力や創造性などを映す窓ともなっていることばは、人類のもつかけがえのない資産です。

インフォメーション・ゾーン

イントロダクション

イントロダクション展示は、民博の展示の見方、文化人類学・民族学の考え方を直感的に身につけていただけるよう工夫した、文字通りのイントロダクション（=導入）のための展示です。ここから世界への旅が始まります。

ビデオテーク・みんぱくシアター

世界の人びとの儀礼や芸能、生活の様子、あるいは展示資料の背景を紹介する映像を視聴できます。15分程度にまとめた映像をはじめ、マルチメディア番組、研究者がフィールドワークで取材した貴重な研究用映像（映像民族誌）を、目的に応じて選択できます。令和4年度からは、映像に没入できるよう大型スクリーン、大型モニターを設置したみんぱくシアターを新設しました。
（令和6年度リクエスト件数： 40,522件）

探究ひろば

リサーチデスク　調べて深める
研究の現場から　知ってつながる
世界をさわる　感じて広がる

展示資料の情報を検索して調べることのできる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、民博の研究や展示をより詳しく知ることができます。展示場で見た資料についてもっと知りたい、民博の研究者って何を調査しているの、モノと身近に接してみたい、という探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用いただけます。

特別展示

みんぱく創設50周年記念特別展「日本の仮面――芸能と祭りの世界」

令和6年3月28日（木）～6月11日（火）

主催　国立民族学博物館
実行委員長　笹原亮二
実行委員［館内］山中由里子、福岡正太
　　［館外］小池淳一（国立歴史民俗博物館）、福原敏男（武蔵大学）
協力　雨宮坐日吉神社、硫黄島八朔太鼓踊り保存会、石井町教育委員会、
　　公益財団法人千里文化財団、国立歴史民俗博物館、御霊神社、
　　島根県立古代出雲歴史博物館、鳥取県立博物館、矢田山金剛山寺

国内各地では、仮面をつけた役が登場する芸能や祭りがおこなわれてきました。本展示では、仮面の役の登場が印象的な各地の芸能や祭りの様相を中心に、あわせて仮面の歴史、仮面と人間の関係などを紹介し、それらをつうじて仮面と人びとの多様なかかわりについて考えました。

みんぱく創設50周年記念特別展「吟遊詩人の世界」

令和6年9月19日（木）～12月10日（火）

主催　国立民族学博物館
実行委員長　川瀬 慈
実行委員［館内］岡田恵美、島村一平、南真木人、廣瀬浩二郎
　　［館外］鈴木裕之（国士舘大学）、ニャマ・カンテ（歌手）、小西公大（東京学芸大学）
協力　公益財団法人千里文化財団、国士舘大学、瞽女ミュージアム高田、東京学芸大学、
　　豊岡市立日本・モンゴル民族博物館
後援　一般社団法人エチオピア・アートクラブ

各地を広範に移動し、詩歌を歌い語る「吟遊詩人」は古くから存在しました。王侯貴族の系譜の語り部、戦場で兵士を鼓舞する楽師、権力者を揶揄する批評家、道化師、庶民の代弁者、ニュースを伝えるメディア、門付（かどづ）け芸人。吟遊詩人は、ときには畏怖の対象とされ、ときには社会の縁に追いやられてきました。近年では、ポピュラー音楽界や消費社会、文化遺産保護運動とのつながりのなかで、芸能の様式や自身のイメージを変え生き延びてきました。吟遊詩人のパフォーマンスやそれらを成りたたせる物質文化を紹介するとともに、彼ら、彼女たちをはぐくんできた地域の人びとの息吹を伝えました。

企画展示

みんぱく創設50周年記念企画展「水俣病を伝える」

令和6年3月14日（木）～6月18日（火）

主催　国立民族学博物館
実行委員長　平井京之介
実行委員［館内］日高真吾、河村友佳子、橋本沙知
　　［館外］吉永利夫（一般社団法人水俣病を語り継ぐ会）、
　　吉永理巳子（一般社団法人水俣病を語り継ぐ会）、
　　遠藤邦夫（一般財団法人水俣病センター相思社）、
　　小泉初恵（一般財団法人水俣病センター相思社）、
　　和高智美（合同会社文化創造巧芸）
協力　一般社団法人水俣病を語り継ぐ会、一般財団法人水俣病センター相思社
後援　環境省、熊本県、水俣市

水俣病の公式確認から70年近くがたちました。現在、熊本県水俣・芦北地域では、展示やガイドツアー、写真、語り部講話などを通じ、水俣病の歴史や被害者の苦しみ、公害の経験をいかしたまちづくりなどを伝える活動がさかんです。どのような人がこの活動をしていて、そこにどういう思いがあるのでしょうか。言葉やモノ、映像、場所はどう活用されているでしょうか。本展では、水俣病を伝える活動の魅力と、そこから学べるものの可能性を探りました。

みんぱく創設50周年記念企画展
「客家と日本――華僑華人がつむぐ、もうひとつの東アジア関係史」

令和6年9月5日(木)～12月3日(火)

主催　国立民族学博物館
実行委員長　奈良雅史
実行委員[館内] 韓 敏、野林厚志、小野林太郎
実行委員[館外] 河合洋尚(東京都立大学)、小林宏至(山口大学)、
横田浩一(東京都立大学)、范智盈(大阪大学)
共催　客家文化発展センター(台湾)
特別協力　東京都立大学 社会人類学教室
協賛　NIHUグローバル地域研究プログラム海域アジア・オセアニア研究プロジェクト、
特別研究班「日本の客家」
協力　全日本崇正会聯合総会、公益財団法人千里文化財団
後援　東京客家崇正公会、関東崇正会、名古屋崇正会、日本客家関西崇正会、沖縄崇正会

華僑華人の一派に客家と呼ばれる人びとがいます。客家は、世界各地に居住し、政治・経済・文化など各方面で成功を収めてきたため、中国地域では「東洋のユダヤ人」と呼ばれることもあります。19世紀後半以降、客家は日本と密接な関係を築きあげてきました。特に1895年に日本が台湾を植民地とすると、台湾の客家にとって日本は身近な存在になります。また、一部の客家は台湾などから日本へ移住し、団体をつくり、暮らしています。客家と日本の関係に焦点を当てることで、これまであまり知られることのなかった東アジア関係史の一面を探りました。

巡回展示
「ユニバーサル・ミュージアム――さわる！“触”の大博覧会」

令和6年7月6日(土)～9月16日(月・祝)

直方谷尾美術館
担当者　廣瀬浩二郎

2021年秋に国立民族学博物館で開催された、特別展「ユニバーサル・ミュージアム――さわる！“触”の大博覧会」の巡回展を直方で開催しました。本展では、来場者が多様な作品群に実際に触れ、触覚(視覚以外の感覚)に集中することで、感覚の多様性に気づきを与えていきます。視覚優位・視覚偏重の従来の展示のあり方を問い直した、ユニバーサル(普遍的)な展示は、単なる障害者対応・弱者支援という枠を超えて国際的にも注目されており、展覧会を通して「さわる」ことの無限の可能性を発信しました。

撮影者：桑田知明

国立アイヌ民族博物館第９回特別展示
「驚異と怪異――想像界の生きものたち」

令和6年9月14日(土)～11月17日(日)

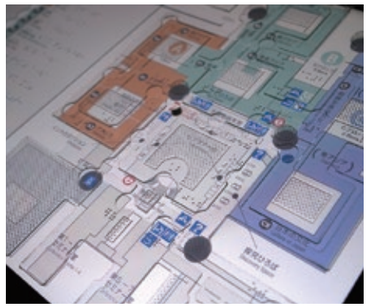
国立アイヌ民族博物館
担当者　山中由里子

近世以前、ヨーロッパや中東においては、人魚や一角獣といった不思議だが実在するかもしれない生物や現象は「驚異」として自然誌の知識の一部とされてきました。また、東アジアにおいては、奇怪な現象や異様な生物の説明として「怪異」という概念が作り上げられてきました。本展示では、常識や慣習から逸脱した「異」なるもの(異境・異人・異類)をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係を解明するとともに、人間の想像力と環境の相関関係を究明しました。
本展は、国立民族学博物館の民族資料を中心に、変幻自在の怪獣ビビちゃん(千歳市教育委員会蔵、動物形土製品[国指定重要文化財])、開拓使たちがつくりだした「北海道イメージ」関連資料、現代のイラストレーターが描くアイヌの伝承に伝わるクリーチャー紹介など、北海道会場オリジナルのコンテンツも追加し、人間の想像力の面白さに迫りました。

撮影者：稲垣 諭

デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］

デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］は、視覚に障がいのある人とない人が、分け隔てなく館内情報にアクセスできるインタラクティブな触地図システムです。タッチパネルディスプレイ上に設置したフィンガーガイドと音声案内との連動によって、館内の位置情報や展示案内を触覚と聴覚から得ることができます。現在、本館の展示場に3台設置され活用されています。
このデジタル触地図は、国立民族学博物館の文化資源プロジェクトにより開発されました。本プロジェクトのメンバーである九州大学大学院芸術工学研究院の平井康之教授、山口大学国際総合科学部の冨本浩一郎講師が主導してデザインしました。



さまざまな賞を受賞したデジタル触地図
［国立民族学博物館触知案内板］

データステーション

過去の特別展や本館展示をパノラマムービーで撮影した館内限定のバーチャルミュージアムや、当館に収蔵されている標本資料などのデータベースをご覧いただけます。

自動運転モビリティ(WHILL 自動運転サービス)

自動運転モビリティは、搭乗者が操作することなく、自動で走行する一人乗りの展示観覧用モビリティです。あらかじめ設定されたルートを安全に走行し、高齢の方や障がいのある方を含むすべての来館者に、安心してご利用いただけます。このモビリティは、WHILL株式会社との産学連携により導入されました。

バーチャルミュージアム

みんぱくウェブサイトでは、バーチャルミュージアムを公開しています。展示場を超広角カメラでくまなく撮影したもので、パソコンやスマートフォンで各展示場の様子をさまざまな角度から見ることができます。一部の展示資料については、解説映像を視聴することができます。

バーチャルミュージアム(ヨーロッパ展示)

国際協力

JICA課題別研修「博物館とコミュニティ開発コース」の実施 “Museums and Community Development”

本コースは、独立行政法人国際協力機構からの全面的な委託を受け、開発途上国の専門家に対して、博物館の運営に必要な収集・整理・保存・展示・教育に関する実践的技術の研修を実施し、博物館を通じて各国の文化の振興に貢献できる人材を育成するものです。
令和6年度は、エジプト、モルディブ、モンゴル、パラオ、パプアニューギアニア、ペルー、セーシェル、スーダン、ザンビアの9ヵ国・地域から9名の研修員を受け入れ、令和6年10月3日から令和6年12月19日まで研修を行いました。 本館における実施だけではなく、滋賀県立琵琶湖博物館などにおける連続講義、元興寺文化財研究所などにおける個別研修のほか、東京国立博物館、国立科学博物館、インターメディアテクや広島平和記念資料館、国立アイヌ民族博物館などへの研修旅行も行いました。 また、研修員全員が自国の博物館の活動や課題を報告し検討する公開フォーラム「世界の博物館2024」を令和6年11月2日に本館で開催し、63名 の方にご参加いただきました。
コースの名称と運営形態は発展的に更新していますが、博物館を通じた国際交流の促進というコースの目的は一貫して継続しており、過去31年にわたる実施期間を通じて、令和7年3月までに、世界各地からの研修修了者及びオブザーバーは66ヶ国・地域の305名におよび、国際的ネットワークを築いています。

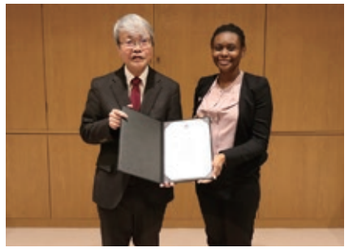
公開フォーラム

民博での講義（文化の展示の現在）

民博での実習（予防保存）

広島研修

アイヌ民族楽器体験


閉講式

みんぱくフェローズ

これまで本館と関わりのあった海外の研究者、および本館と関連の深い国内外の研究機関を「みんぱくフェローズ」として位置づけ、そのネットワークを構築しています。「みんぱくフェローズ」のメンバーには、Minpaku Anthropology Newsletterを定期的に送付しています。

フェローズ地域別一覧　令和7年3月31日現在

地域	
アジア・中東・オセアニア	573
ヨーロッパ	146
北米・中南米	189
アフリカ	81
合計	989

社会連携

本館では、国内外の博物館や大学などとの学術連携を通して、文化資源の系統的、有機的活用を実践するためのネットワークづくりを試みてきました。
また、さまざまな団体と連携して、広く社会に貢献する事業や活動を展開しています。

貸出用学習キット「みんぱっく」

令和6年度 貸出期間　令和6年4月8日～令和7年3月12日
貸出件数 166件　利用者総数 22,175名

学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱっく」の貸出を実施しています。「みんぱっく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、13種23パック（6月末まで）、12種21パック（7月から）を用意しています。 異文化との出会いにおいてどのようにものを見つめ、それらと語らうことができるのか、その先にある物語をどう読みとるのかという、本館ならではのコンセプトで企画されています。

みんぱっく「モンゴル―草原のかおりをたのしむ」

貸出パック

- ●アンデスの玉手箱― ペルー南高地の祭りと生活
- ●ジャワ島の装い―宗教と伝統
- ●インドのサリーとクルター
- ●アラビアンナイトの世界（6月末まで）
- ●イスラム教とアラブ世界のくらし
- ●韓国のこども時間― 日常と伝統
- ●アイヌ文化にであう
- ●モンゴル― 草原のかおりをたのしむ
- ●あるく、ウメサオタダオ展
- ●世界のムスリムのくらし1― 日常の中の祈り
- ●世界のムスリムのくらし2― 同時代を生きる
- ●エチオピアのコーヒーセレモニー
- ●エチオピアをまとう―アムハラの装い

みんぱっく「韓国のこども時間― 日常と伝統」

ワークショップ

本館の研究者の研究成果を社会に還元することをめざし、ものづくりなどの体験型プログラムを通して、世界の文化を紹介しています。

実施日	実施ワークショップ	講師
令和6年7月21日（日）	みんぱく夏休みこどもワークショップ 「フィールドワークに挑戦！――五感で体験 日本の祭り」	鈴木昂太
令和6年9月16日（月・祝）、23日（月・祝）	企画展関連ワークショップ 「食べるお茶 ―― 擂茶（れいちゃ）づくりで学ぶ客家の暮らし」	奈良雅史、松本 学（松茶商店 代表） 河合洋尚（東京都立大学 准教授）
令和6年12月22日（日） 令和7年1月11日（土）、12日（日）	年末年始イベント 「みんぱくで巳（み）～つけた！」	企画課
令和7年3月29日（土）	企画展関連ワークショップ 「アラビア書道ことはじめ――やってみよう筆づくり」	相島葉月 山岡幸一（日本アラビア書道協会 事務局長）

「フィールドワークに挑戦！――五感で体験 日本の祭り」

「食べるお茶――擂茶（れいちゃ）づくりで学ぶ客家の暮らし」

「みんぱくで巳（み）～つけた！」

「アラビア書道ことはじめ――やってみよう筆づくり」

博物館社会連携事業強化プロジェクト

高等教育における本館がもつ文化資源の複合的利活用の可能性やその教育的効果を検証するため、甲南女子大学との協働教育プログラムや、個人の大学生及び大学院生を対象にした「みんぱく×大学プロジェクト」を企画・実施しました。これらの活動から得られた知見をもとに、大学生・大学院生・大学教員が本館の文化資源を複合的に利活用するためのブックレット『みんぱくのディープなトリセツ』を作成・配布しました。

ブックレット
『みんぱくのディープなトリセツ』

みんぱくSama-Sama塾

知的障害者に対して生涯学習の場を提供しうる新たな博物館モデルを構想するため、中学生以上の知的障害者を対象とした学習ワークショップ「みんぱくSama-Sama塾」を開催しています。 世界の文化についての講義、展示場でのクイズラリー、アート制作活動の3部で構成され、令和6年度は、7月と10月の合計2回開催し、63名の参加がありました。

カムイノミと北海道アイヌ協会技術者研修

本館では、アイヌ文化伝承と民博資料の活用・安全な保管などを目的として、公益社団法人北海道アイヌ協会とのあいだに協定を結び、ふたつの事業を実施しています。ひとつはカムイノミの実施です。カムイノミはアイヌ語でカムイ（神・霊的存在）へ祈ることで、本館が所蔵する資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としています。以前は萱野茂氏（故人）を祭司に非公開でおこなっていました。平成19年度からは、同協会の各地域の会員がカムイノミとあわせてアイヌ古式舞踊の演舞を実施し、公開しています。令和6年度は前年度に引き続き、帯広カムイトウウポポ保存会の協力により開催しました。

もうひとつの事業は、北海道アイヌ協会が派遣する伝統工芸技術者の外来研究員としての受け入れです。本館が所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的としていますが、令和6年度の受け入れはありませんでした。

カムイノミ（令和６年度）

音楽の祭日

「音楽の祭日」は、1982年にフランスで始まった「音楽の祭典」の精神にならった市民参加による共創型イベントです。プロ・アマ、ジャンルを問わず、本館での演奏を希望する個人・団体を公募して、抽選で出演者を決定し、令和6年6月23日（日）にみんぱくインテリジェントホール（講堂）で開催しました。市民の活動の場として博物館を開放する試みとして定着し、21回目も好評を博しました。

博学連携事業

校外学習や遠足などでみんぱくを利用する際の事前・事後の準備や学習に役立つツールを紹介することを目的として、春と秋の年に2回、本館を会場として「事前見学&ガイダンス」をおこない、授業での博物館活用の促進を図っています。また、中学生に「職場体験活動」の機会を提供しており、令和6年度は3校7名を受け入れました。

ボランティア団体の活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動をサポートする自律的な組織として平成16年9月に発足した団体です。

展示場内における視覚障害者の展示体験をサポートするプログラム「視覚障害者むけ本館展示場案内」や、主に小学生を対象とした体験型見学プログラム「わくわく体験 in みんぱく」、一般来館者向けのものづくりワークショップなど、多岐に広がる活動を本館との協働で進めています。また、館外でおこなわれるワークショップフェスやボランティア交流会にも積極的に参加し、他の博物館や施設との交流を深めてきました。

特別展関連 MMP ワークショップ「変身体験！お祭りの仮面を作ろう」

「西アフリカのお話し会」の公演

わくわく体験 in みんぱく（「絵本とおはなし」の様子）

視覚障害者むけ本館展示場案内

点字体験ワークショップ

みんぱくゼミナール

毎月第3土曜日に、研究部の教員などが最新の研究成果をわかりやすく講演しています。

令和６年度実施　受講者総数 会場 2,084名　□特別展関連事業　○企画展関連事業

実施回数	実施日	担当講師	演題	参加者数
□544回	令和6年4月20日（土）	笹原亮二	日本の仮面	311名
□545回	令和6年5月18日（土）	福岡正太	東南アジアの仮面	193名
546回	令和6年6月15日（土）	鈴木昂太	神楽とはなにか？――語意に着目した機能論的分析の試み	211名
547回	令和6年7月20日（土）	藤井真一	内戦の過ごし方――ソロモン諸島ガダルカナル島の人びとの紛争経験	101名
□548回	令和6年8月17日（土）	南真木人	ネパールの「吟遊詩人」――映像音響資料の当事者との共有	128名
□549回	令和6年9月21日（土）	川瀬 慈	世界を異化する歌と語り――エチオピアの吟遊詩人	215名
○550回	令和6年10月19日（土）	河合洋尚（東京都立大学 准教授） 小林宏至（山口大学 准教授） 奈良雅史	客家民居と日本	170名
551回	令和6年11月16日（土）	MATTHEWS, Peter J.	サトイモを探り、世界を識る	116名
552回	令和6年12月21日（土）	宇田川妙子	地域社会で生きること――グローバル化のなかのイタリアの人びとの暮らしから	113名
553回	令和7年1月18日（土）	河西瑛里子	ヨーロッパの多神教世界――魔女、女神、ドルイド	301名
554回	令和7年2月15日（土）	上羽陽子	道具資源としての植物利用――バスケタリーから考える	112名
555回	令和7年3月15日（土）	吉田憲司	「知のフォーラム」をめざした博物館づくり――みんぱくとの50年、みんぱくでの37年	113名

合計 2,084名

第546回みんぱくゼミナール「神楽とはなにか？―― 語意に着目した機能論的分析の試み」

第550回みんぱくゼミナール「客家民居と日本」

第555回みんぱくゼミナール「「知のフォーラム」をめざした博物館づくり―― みんぱくとの50年、みんぱくでの37年」

みんぱくウィークエンド・サロン ――研究者と話そう

研究部の教員と来館者が、展示場内でより身近に語り合いながら、みんぱくの研究を知ってもらうことを目的に、開館30周年記念事業として平成19年度に始まりました。令和4年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から本館セミナー室で開催していましたが、令和5年1月より本館展示場ナビひろばの他、企画展示場や特別展示館でも開催しました。令和6年度は、日曜日に計23回開催し、参加者は計1,919名でした。

みんぱく創設50周年記念研究公演　令和６年度実施　参加者総数　会場 670名

文化人類学・民族学に関する理解を深めてもらうことを目的として、世界の諸民族の音楽や芸能などの公演を実施しています。

「千本ゑんま堂大念佛狂言民博公演」

実施日　令和6年4月14日（日）
司会　笹原亮二
解説　宮田勝行（千本ゑんま堂大念佛狂言保存会 会長）
出演　千本ゑんま堂大念佛狂言保存会
参加者数　342名

「アリラン峠の向こうには――在日コリアン音楽のこれから」

実施日　令和6年8月25日（日）
司会　福岡正太
解説　高 正子（大阪コリアタウン歴史資料館 館長）
出演　李 政美、安 聖民、河 栄守、金 栄実、梁 聖晞
参加者数　328名

創設50周年記念みんぱく映画会　令和6年度実施　参加者総数　会場2,574名

上映される機会の少ない文化人類学・民族学に関する貴重な映像資料などを教員の解説を交えて上映しています。

実施日	担当講師	題名	参加者数
令和6年5月3日(金・祝)	福岡正太、笹原亮二、 藤岡幹嗣(監督/立命館大学映像学部 教授)、 徳田 保(硫黄島八朔太鼓踊り保存会 会長)、 室之園晃徳(三島村教育長)、 佐藤央隆(三島村教育委員会事務局)	島と人とメンドン	290名
令和6年6月8日(土)	平井京之介、 吉永利夫(一般社団法人水俣病を語り継ぐ会 理事)	水俣一揆―― 一生を問う人々	311名
令和6年7月13日(土)	信田敏宏、島村一平	TRIO	中止
令和6年9月8日(日)	奈良雅史、河合洋尚(東京都立大学 准教授)	一八九五	344名
令和6年10月13日(日)	廣瀬浩二郎、萱森直子(瞽女唄演奏者)、 斎藤弘美(「瞽女ミュージアム高田」顧問)	世界の感触を取り戻せ!――目の見えない者は、目に見えない物を知っている 上映作品「瞽女GOZE」	360名
令和6年10月13日(日)	岡田恵美、阿部櫻子(監督)	The Path ～バルバティ・バウル 風狂の歌ごえ	237名
		計	1,542名

みんぱく映像民族誌シアター

実施日	担当講師	題名	参加者数
令和7年2月2日(日)	黒田賢治、 小長谷有紀(国立民族学博物館 名誉教授)	20世紀の証言 モンゴル ――工業、牧畜、農業	65名
令和7年2月11日(火・祝)	黒田賢治、川瀬 慈	つながりを生きる 東京のエチオピア移民	74名
		計	139名

みんぱくワールドシネマ

「映像から考える〈人類の未来〉」のテーマにふさわしい映画を選び、研究者の解説による上映会をシリーズで実施しました。

実施日	担当講師	題名	参加者数
令和6年5月25日(土)	菅瀬晶子、野林厚志	GAGA: ハヨンの家族	302名
令和6年12月14日(土)	菅瀬晶子	ベトルーニャに祝福を	272名
令和7年2月24日(月・祝)	黒田賢治、島村一平	セールス・ガールの考現学	291名
		計	865名

映像人類学フォーラム

実施日	担当講師	題名	参加者数
令和6年10月26日(土)	川瀬慈、南真木人	吟遊詩人をめぐる映像民族誌の視点――エチオピアとネパールの比較から 『アズマリ――声の饗宴』 『カトゥマンドゥのサーランギ奏者たち』 (みんぱく映像民族誌第35集)	28名

キャンパスメンバーズ

国立民族学博物館と大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。
加入していただいた学校・法人には、展示の無料観覧や研究公演・映画会など催しの無料参加、ミュージアム・ショップの割引利用などの連携内容(特典)があります。

令和6年度の加盟校

大阪大学、京都大学、千里金蘭大学、学校法人塚本学院(大阪芸術大学、大阪芸術大学短期大学部、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校 ※通信課程含む)、同志社大学(グローバル地域文化学部、文化情報学部・文化情報学研究科、国際教育インスティテュート)、立命館大学、追手門学院大学(文学部、国際学部、国際教養学部)

沿革

1935	昭和10年		澁澤敬三氏、白鳥庫吉博士を中心に財団法人日本民族博物館の設立を計画
1964	昭和39年	7月	日本民族学会、日本人類学会、日本考古学協会、日本民俗学会および日本民族学協会は、「国立民族学研究博物館設置」について、文部大臣など関係方面に要望
1972	昭和47年	5月	民族学研究博物館の調査に関する会議（座長： 桑原武夫）は、文部大臣に「民族学研究博物館の基本構想について（報告）」を提出
1973	昭和48年	4月	国立民族学研究博物館（仮称）の創設準備に関する会議および創設準備室を設置
1974	昭和49年	6月	国立学校設置法の一部を改正する法律（昭和49年法律第81号）の施行により、国立民族学博物館が創設（管理部3課6係、情報管理施設2係、5研究部10研究部門）
		8月	パプアニューギニアをはじめとして、海外における標本資料などの収集を開始
1975	昭和50年	12月	旧文部省史料館が所蔵していた民族資料28,432点を国文学研究資料館から移管
1977	昭和52年	11月	国立民族学博物館新営工事（28,778㎡および環境整備）が竣功、開館式典を挙行。 オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、音楽、言語、東南アジア、東アジア（日本の文化）展示およびビデオテークを一般公開
1978	昭和53年		民族学研究の拠点として、長期的・計画的に取り組む「特別研究」を開始
1979	昭和54年	3月	第4展示場（1,272㎡）が竣功、東アジア（日本の文化）展示を拡充し一般公開。 11月に中央・北アジア、東アジア（アイヌの文化）展示を一般公開
1981	昭和56年	2月	講堂（3,704㎡）が竣功
1983	昭和58年	3月	第8展示場など（4,816㎡）が竣功。 11月に東アジア（朝鮮半島の文化、中国地域の文化）展示を一般公開
1984	昭和59年	11月	創設10周年記念式典を挙行。『国立民族学博物館十年史』を刊行
1987	昭和62年		開館10周年を迎え、記念行事を実施
1989	平成元年	4月	総合研究大学院大学文化科学研究科（地域文化学専攻・比較文化学専攻の二専攻）が本館を基盤として設置（2023年度より先端学術院先端学術専攻人類文化研究コースに改組）
		6月	特別展示館・書庫棟（5,292㎡）が竣功
		9月	特別展示館竣功記念第1回特別展「大アンデス文明展 ―よみがえる太陽の帝国インカ」を一般公開
1993	平成5年	8月	本館増築・共同研究棟（891㎡）が竣功
1994	平成6年		創設20周年を迎え、記念行事を実施
		6月	地域研究企画交流センターを設置（平成17年度末に廃止）
1995	平成7年	1月	阪神・淡路大震災による被害のため、展示場を45日間にわたり全面閉鎖（2002～2003年に耐震改修工事を実施）
		4月	COE（「卓越した研究拠点」）の研究課題「地球時代におけるマルチメディアによる新しい民族学研究の展開に関する先導的研究」開始（平成11年度末に終了）
1996	平成8年	3月	第7展示棟（6,439㎡）が竣功。 11月に言語展示、東南アジア展示のリニューアルおよび映像の広場、ものの広場、南アジア展示を一般公開
1997	平成9年		開館20周年を迎え、記念行事を実施。 11月に記念式典を挙行
1998	平成10年	4月	大学共同利用機関組織運営規則の一部を改正する省令（平成10年文部省令第24号）の施行により、5研究部を改組（4研究部、1研究施設）
1999	平成11年	5月	みんぱく電子ガイドおよび学習コーナー完成、一般公開
2000	平成12年	3月	東アジア（朝鮮半島の文化）展示リニューアル、以降2003年まで本館展示の一部リニューアルなど
2004	平成16年	4月	国立大学法人法（平成15年法律第112号）の施行により、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構が発足 4研究部、1研究施設を、3研究部、2研究施設に改組 研究者コミュニティの代表を含む共同利用委員会による審査システム、公募の拡大など共同研究の体制を整備 本館の組織をあげて取り組む「機関研究」を開始
		6月	創設30周年を迎える
2006	平成18年	3月	『国立民族学博物館30年史』を刊行
		4月	民族学資料共同利用窓口を設置
2007	平成19年		開館30周年を迎え、記念行事を実施。 11月に記念式典を挙行
2008	平成20年	2月	日本文化人類学会と連携事業に関する協定を締結
2009	平成21年	3月	展示の新構築を開始
2010	平成22年	4月	国際学術交流室の設置など新しい体制を整備
2013	平成25年	4月	監査室、梅棹資料室を設置し、新しい体制を整備
2014	平成26年	1月	多機能資料保管庫(1,423㎡)が竣功
2017	平成29年	3月	本館展示の新構築を完了し、記念式典を挙行
		4月	3研究部、2研究施設を、4研究部、1研究施設に改組 開館40周年を迎え、記念行事を実施。 11月に記念式典を挙行
		12月	共同利用型科学分析室を設置
2018	平成30年	6月	大阪府北部地震による被害のため、展示場を66日間にわたり全面閉鎖（図書室は49日間の閉室）
2019	令和元年	12月	本館展示の展示更新を開始（2024年3月まで）
2020	令和2年	2月	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため111日間にわたり臨時休館
		6月	新トーテムポールを立ち上げ
2021	令和3年	4月	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため59日間にわたり臨時休館 インテリジェントホール（講堂）運用開始
2022	令和4年	3月	みんぱくシアターおよびデータステーション完成、一般公開
2024	令和6年		創設50周年を迎え、記念行事を実施
		12月	創設50周年記念史『語りあい　ひらける世界―みんぱく五十年の歩み』を刊行

歴代館長 令和7年4月1日現在

初代
昭和49年6月－平成5年3月
梅棹忠夫（故人）
民族学・比較文明論

第2代
平成5年4月－平成9年3月
佐々木高明（故人）
東・南アジア農耕文化史

第3代
平成9年4月－平成15年3月
石毛直道
文化人類学

第4代
平成15年4月－平成21年3月
松園万亀雄
社会人類学

第5代
平成21年4月－平成29年3月
須藤健一
社会人類学

第6代
平成29年4月－令和7年3月
吉田憲司
文化人類学、博物館人類学

第7代
令和7年4月－
關 雄二
アンデス考古学、ラテンアメリカ研究

名誉教授 令和7年4月1日現在

昭和59年4月1日　（称号授与年月日）
祖父江孝男（故人）
心理人類学

昭和60年4月1日
岩田慶治（故人）
文化人類学

昭和61年4月1日
加藤九祚（故人）
北・中央アジア民族史

昭和63年4月1日
伊藤幹治（故人）
宗教人類学

昭和63年4月1日
中村俊亀智（故人）
民族技術学・用具論

平成元年4月1日
君島久子（故人）
中国民間伝承

平成2年4月1日
和田祐一（故人）
言語人類学

平成3年4月1日
垂水 稔（故人）
空間領域の人類学

平成4年4月1日
杉本尚次（故人）
文化地理学・文化人類学

平成5年4月1日
梅棹忠夫（故人）
民族学・比較文明論

平成5年4月1日
大給近達（故人）
ラテンアメリカ文化構造

平成5年4月1日
片倉素子（故人）
社会地理学・民族学

平成6年4月1日
竹村卓二（故人）
社会人類学

平成7年4月1日
周 達生（故人）
物質文化論

平成7年4月1日
松澤員子
社会人類学

平成8年4月1日
大丸 弘（故人）
衣生活とその周辺の比較生活史

平成8年4月1日
友枝啓泰（故人）
社会人類学

平成8年4月1日
藤井知昭（故人）
民族音楽学・音楽人類学

平成9年4月1日
佐々木高明（故人）
東・南アジア農耕文化史

平成9年4月1日
杉村 棟（故人）
民族芸術学

平成10年4月1日
和田正平
比較文化論・アフリカ民族学

平成12年4月1日
清水昭俊
家族比較論・オセアニア研究

平成13年4月1日
黒田悦子
民族社会文化論・中米人類学

平成13年4月1日
崎山 理
言語人類学・オセアニア言語学

平成13年4月1日
端 信行
経済人類学・アフリカ民族学

平成14年4月1日
小山修三（故人）
民族考古学

平成14年4月1日
森田恒之
保存科学・民族技術

平成15年4月1日
石毛直道
文化人類学

平成15年4月1日
栗田靖之
博物館人類学・ブータン研究

平成15年4月1日
杉田繁治
コンピュータ民族学・文明学

平成16年4月1日
熊倉功夫
日本文化史

平成16年4月1日
立川武蔵
宗教哲学・仏教思想

平成16年4月1日
田邉繁治
東南アジア社会人類学

平成16年4月1日
藤井龍彦
新大陸先史学

平成16年4月1日
山田睦男（故人）
ラテンアメリカ史・ラテンアメリカ地域研究

平成17年4月1日
江口一久（故人）
民族言語学・口承文芸論

平成17年4月1日
大塚和義
アイヌ民族学・北アジア研究

平成17年4月1日
松原正毅
社会人類学・遊牧社会論

平成18年4月1日
石森秀三
観光文明学・文化開発論

平成18年4月1日
野村雅一（故人）
身体コミュニケーション論・南欧民族学

平成19年4月1日
大森康宏
映像人類学・民族誌映画

平成19年4月1日
山本紀夫
民族植物学

平成21年4月1日
松園万亀雄
社会人類学

平成22年4月1日
松山利夫
文化人類学・オーストラリア先住民研究

平成23年4月1日
長野泰彦
言語学、チベット・ビルマ地域の言語文化

平成24年4月1日
秋道智彌
生態人類学・海洋民族学

平成24年4月1日
中牧弘允
宗教人類学・経営人類学

平成26年4月1日
小林繁樹
道具人類学・文化人類学・博物館学

平成26年4月1日
田村克己
東南アジア文化人類学

平成26年4月1日
吉本 忍
民族工芸論・民族技術論

平成27年4月1日
久保正敏
民族情報学・コンピュータ民族学・オーストラリア研究

平成27年4月1日
庄司博史（故人）
言語学・言語政策論

平成27年4月1日
八杉佳穂
言語人類学・中米文化史

平成28年4月1日
朝倉敏夫
韓国社会研究

平成28年4月1日
佐々木史郎
文化人類学・北アジア研究

平成28年4月1日
杉本良男
社会人類学・南アジア研究

平成29年4月1日
須藤健一
社会人類学

平成29年4月1日
竹沢尚一郎
宗教人類学・西アフリカ研究

平成29年4月1日
塚田誠之
歴史民族学・中国研究

平成30年4月1日
印東道子
オセアニア考古学

平成30年4月1日
横山廣子
文化人類学・中国社会研究

令和2年4月1日
寺田吉孝（故人）
民族音楽学・南アジア研究

令和3年4月1日
出口正之
非営利組織論・政策人類学

令和4年4月1日
關 雄二
アンデス考古学・ラテンアメリカ研究

令和4年4月1日
林 勲男
社会人類学・オセアニア研究

令和5年4月1日
小長谷有紀
牧畜文化論・モンゴル研究

令和5年4月1日
鈴木七美
歴史人類学・医療人類学・エイジング研究

令和5年4月1日
西尾哲夫
認識言語学・アラブ研究

令和5年4月1日
森 明子
中部ヨーロッパ文化人類学

令和6年4月1日
池谷和信
環境人類学・人文地理学・アフリカ研究・地球学・生き物文化誌学

令和6年4月1日
岸上伸啓
文化人類学・北方文化研究

令和6年4月1日
園田直子
保存科学

令和7年4月1日
宇田川妙子
南ヨーロッパ研究・性研究

令和7年4月1日
笹原亮二
民俗学・民俗芸能研究

令和7年4月1日
新免光比呂
宗教学・東欧研究

令和7年4月1日
鈴木 紀
開発人類学・ラテンアメリカ文化論

令和7年4月1日
MATTHEWS, Peter J.
先史学・民族植物学

令和7年4月1日
吉田憲司
文化人類学、博物館人類学

現員

令和7年4月1日現在

区分	館長	教授	准教授	助教	特任教授	特任准教授	特任助教	特別研究員	小計	事務職員 技術職員含む	合計
現員	1	22	18	10	0	0	1	2	54	48	102
客員（国内）		6	3	1					10		10
客員（国外）		1									1
館長	1								1		1
監査室										(4)	(4)
管理部										27	27
情報管理施設		(1)								21 (1)	21 (2)
研究部		20	14	7	0	0	1		42		42
学術資源研究開発センター		2	4	3					9		9
国立民族学博物館								2	2		2

注）客員は外数　（　）内は兼務　事務職員には特任専門職員1名を含む

予算

令和6年度

収入

区分	単位：百万円
運営費交付金	2,677
基幹運営費交付金	2,469
機構連携経費等	208
収入	67
入場料	49
その他	18
施設整備費補助金	222
科学研究費補助金	235
計	3,201

支出

区分	単位：百万円
人件費	1,183
物件費	1,783
教育研究経費	606
共同利用経費	537
一般管理費	418
施設費	222
科学研究費補助金	235
計	3,201

注）補正後の予算額
前年度繰越分を含み次年度繰越額を除く

令和7年度

収入

区分	単位：百万円
運営費交付金	2,603
基幹運営費交付金	2,448
機構連携経費等	155
収入	62
入場料	45
その他	17
施設整備費補助金	581
科学研究費補助金	349
計	3,595

支出

区分	単位：百万円
人件費	1,177
物件費	2,069
教育研究経費	466
共同利用経費	591
一般管理費	431
施設費	581
科学研究費補助金	349
計	3,595

注）年度当初予算額
前年度繰越分及び機構からの追加配分を含む

施設

建設の基本構想

敷地全体が公園計画に調和するように、建物の高さを全体的にできる限り低くおさえ、伝統的な日本建築のもつ美の特色を活かしています。
平面計画は複数のブロックによって構成されており、それぞれのブロック外壁は原則として採光をおこなわないことになっていますが、展示場の内側には採光が可能なパティオ（中庭）を設けています。
各パティオは、建築内部に屋外の環境を持ち込むばかりでなく、屋外展示スペースとしても利用することができます。
動線計画は、1階に収蔵、2階に展示、3･4階に研究の機能をまとめて配置し、エレベータ･階段で垂直に最短距離で結んでいます。
とくに展示のための観客の動線は、全体を詳細にみることも、一部分展示ブロックを簡略してみることも可能な回遊方式になっています。
また、ユニバーサルデザインを積極的に導入し、点字ブロックの設置などバリアフリー化をおこなっています。

施設の概要

敷地面積=40,821㎡
建築面積=18,177㎡
建築延床面積=52,648㎡

4階 7,207㎡
研究部門

3階 中3、中4階を含む 7,340㎡
研究・図書・管理部門

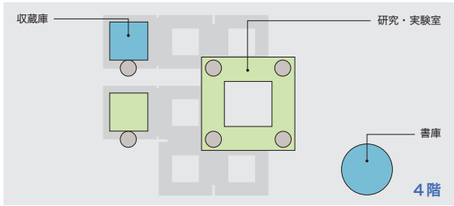
屋階 846㎡

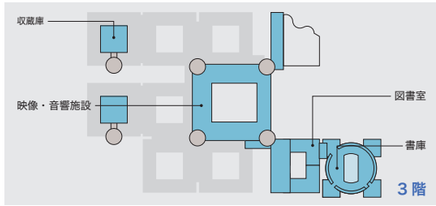
2階 中2階を含む 16,830㎡
展示･管理部門

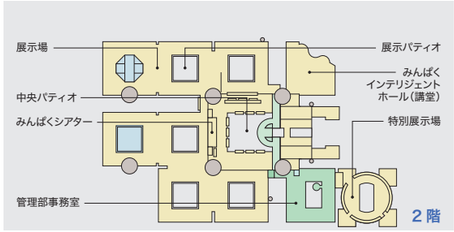
1階 多機能資料保管庫含む 17,410㎡
エントランス・収蔵・サービス部門

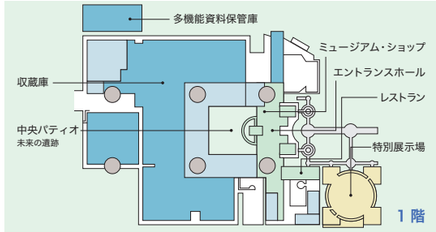
地階 3,015㎡

（内　本館展示場　10,938㎡　特別展示場 1階　851㎡　2階　639㎡ ）









国内外の協定

海外の研究機関との研究連携、研究協力の推進

研究連携や研究協力のために、海外の研究機関と学術協定を締結しています。 令和6年度は、順益台湾原住民博物館（台湾）、国立台北芸術大学（台湾）、 北アリゾナ博物館（アメリカ）、国立台湾歴史博物館（台湾）との協定を更新しました。 また、アディスアベバ大学（エチオピア）、フィジー文化経済社会信託機構（フィジー）、南太平洋大学（フィジー）との協定を新たに締結しました。

協定先機関名	協定締結日	協定の概要
南太平洋大学（フィジー）	令和6年9月12日	学術交流、フィールドワークの推進。
フィジー文化経済社会信託機構（フィジー）	令和6年7月1日	学術交流、フィールドワークの推進、展示協力。
アディスアベバ大学（エチオピア）	令和6年7月1日	国際共同研究、研究・人材交流、イベント実施などの学術研究協力。
客家委員会客家文化発展センター（台湾）	令和5年11月21日	博物館展示に関する交流と協力。
大エジプト博物館（エジプト）	令和5年10月1日	人材交流、博物館資料の管理・展示・分析、博物館マネージメントなどに係る情報交換、共同研究・展示企画の推進。
ゲント大学（ベルギー）	令和5年9月18日	国際共同調査・研究、研究者交流、展示資料に関する情報の交換など。
カセサート大学林学部（タイ）	令和元年11月22日	相互理解、相互利益及び協力関係の原則に基づいた学術研究及び学術交流の強化・促進。
ケニア国立博物館群（ケニア）	令和元年11月7日	共同調査プロジェクトの実施、講演会、シンポジウム、共同展示の実施、調査に関わる情報と資料の交換、文化ならびに博物館学に関する交流プログラムの振興、研究スタッフの交流に関する協力。
バングラデシュ農業大学（バングラデシュ）	令和元年11月3日	相互理解、相互利益及び協力関係の原則に基づいた学術研究及び学術交流の強化・促進。
サマルカンド考古学研究所（ウズベキスタン）	令和元年9月19日	国際共同発掘調査・研究、研究者交流、考古学に関する資料や情報の交換等・研究者・学芸員などの人材交流。
国立研究革新庁・考古・言語・文学研究機構・環境考古・海事考古・持続的文化研究所（インドネシア）	令和元年6月10日	インドネシア国内での国際共同調査の実施、および研究成果の共有。
国立博物館機構（ザンビア）	平成30年8月12日	国際共同研究、研究者の交流、博物館に関する資料や情報交換など。
イラン国立博物館（イラン）	平成29年11月8日	国際共同研究、研究者の交流、博物館に関する資料や情報交換など。
ブリティッシュコロンビア大学 人類学博物館―UBC―（カナダ）	平成29年3月9日	研究交流、人材交流、データベース構築の協力など。
浙江大学人類学研究所・図書館（中国）	平成28年4月19日	資料の寄贈、人材交流、共同研究など。
ヴァンダービルト大学（米国）	平成28年1月15日	国際共同研究、国際シンポジウムの開催など。
国立台湾歴史博物館（台湾）	平成27年10月16日	共同研究、博物館展示協力など。
北アリゾナ博物館（米国）	平成26年7月4日	学術交流・研究の強化・発展。
中国社会科学院民族学・人類学研究所（中国）	平成24年8月28日	学術交流ならびに研究プロジェクトや研究資料、学術情報及び公開出版物の交換と相互利用の展開など。
フィリピン国立博物館（フィリピン）	平成24年7月18日	共同研究、研修、出版、展示等のプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進など。
アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）	平成24年6月3日	学術協力、共同研究のプロジェクトの展開、博物館資料の展覧および教育分野における協力活動など。
国立台北芸術大学（台湾）	平成21年5月15日	相互の学術交流、研究プロジェクトの展開、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。
韓国国立民俗博物館（韓国）	平成19年7月11日	研究者交流、共同研究の実施、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。
順益台湾原住民博物館（台湾）	平成18年7月1日	共同研究、博物館展示協力など。
国立サン・マルコス大学（ペルー）	平成17年6月14日	考古学分野における共同研究員調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流の促進。

国内の研究機関等との研究連携、協力の推進

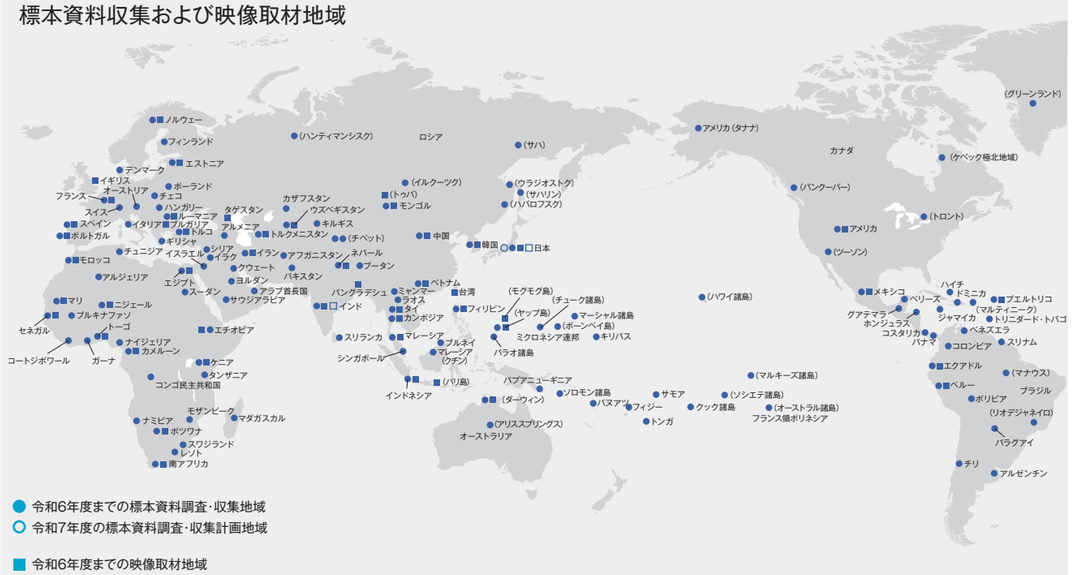
国内の大学等の研究機関や学会とも研究連携や協力、共同研究等の推進のため、学術協定を締結しています。 令和6年度は、9月に兵庫県豊岡市（日本・モンゴル民族博物館）との間で協定を締結しました。

協定先機関名	協定締結日	協定の概要
兵庫県豊岡市（日本・モンゴル民族博物館）	令和6年9月1日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
聖心女子大学グローバル共生研究所	令和6年1月9日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
公益財団法人大阪国際平和センター	令和5年12月1日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
北海道釧路湖陵高等学校	令和5年3月27日	教育及び社会の発展への寄与。
岡山大学文明動態学研究所	令和4年9月12日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
国立情報学研究所	令和4年8月1日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
金沢美術工芸大学	令和3年3月22日	平成の百工比照コレクションデータベースを基に、高等教育におけるデータベースの在り方及び活用手法についての検証。 社会連携事業と連動させることによる高等教育教材の実用化。
神奈川大学日本常民文化研究所	令和2年3月26日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
一般社団法人東洋音楽学会	令和元年11月3日	音楽文化の持続可能な発展と、音楽文化研究の深化に寄与。
一般社団法人文化財保存修復学会	平成30年11月19日	文化財の保存に関わる科学・技術の発展と普及。
京都芸術大学	平成30年3月19日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
大阪大学	平成30年3月17日	学術研究、教育、社会貢献及びその他諸活動の発展への寄与。
山形大学	平成30年2月16日	学術研究、教育及び社会の発展に貢献。
神戸大学大学院人文学研究科	平成28年7月15日	研究教育のための学術交流。
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	平成27年11月25日	世界諸地域の言語と文化に関する学術研究、連携協力。
株式会社海遊館	平成27年11月19日	産学連携の推進、学術研究の振興、研究成果による社会貢献、連携協力。
大阪工業大学	平成27年3月23日	情報メディア・ディジタルコンテンツに関する学術研究、連携協力。
金沢大学	平成26年3月23日	両機関間の連携・協力の実績を基盤に、緊密かつ組織的な体制強化。
日本文化人類学会	平成20年2月27日	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用の促進。 人類社会における学術の発展と普及への寄与。

資料とデータベース

本館では、文化人類学・民族学を核とする諸分野の資料や情報を集積・整備して国内外研究者の共同利用に供するとともに、展示や各種事業などを通じて研究成果の社会還元をおこなっています。そのために、資料の収集、管理、情報整備、データベースとコンテンツの制作、展示、各種事業への展開の方法についても研究を重ねています。
情報管理施設は、これらの活動を支援するために設けられた附属施設です。

標本資料収集および映像取材地域



諸資料の所蔵一覧 令和7年3月31日現在

標本資料(未登録資料含む)	347,183点
海外資料	181,020点
国内資料	166,163点
映像・音響資料	**73,311点**
映像資料	8,426点
音響資料	64,885点

文献図書資料	
図書(製本雑誌含む)	700,323冊
日本語資料	278,604冊
外国語資料	421,719冊
雑誌	17,542種
日本語雑誌	10,396種
外国語雑誌	7,146種

HRAF Human Relations Area Files	
地域(民族集団)ファイル	465ファイル
原典(テキスト)	9,115冊

※現在はwebデータベースとして提供
eHRAF World Cultures
地域(民族集団)ファイル:363ファイル
原典(テキスト):6,714点
eHRAF Archaeology
(先史時代など考古学的な文献データベース)
地域(民族集団)ファイル:110ファイル
原典(テキスト):2,634点
(令和7年4月現在)

データベース一覧 令和7年3月31日現在

本館の所蔵資料をはじめ、さまざまな研究資料や研究成果をデータベース化し、館内外に広く提供しています。なお、民族学研究アーカイブズについては25ページに掲載しています。(＊印は、館内でのみ利用できるデータベース。各データベースの〔 〕内の数値は収録件数。)

標本資料

標本資料目録
本館が所蔵する標本資料(生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など)の情報(画像あり)。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。〔287,800件〕

標本資料詳細情報
本館が所蔵する標本資料(生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など)の情報(画像あり)。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。〔館内公開:287,768件(内インターネット公開:138,969件)〕

標本資料記事索引
本館関連出版物に掲載された所蔵標本資料の解説について、その書誌事項を標本資料別に整理したデーターベース。〔84,114件〕

韓国生活財
ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録(画像あり)。〔7,827件〕

ジョージ・ブラウン・コレクション(日本語版、英語版)
宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報(画像あり)。〔2,992件〕

カナダ先住民版画 ＊
本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説(画像あり)。特別展「自然のこえ 命のかたち ―カナダ先住民の生み出す美」(2009年)の展示資料を中心に収録。〔158件〕

チベット宗教図像(白描画)
本館が所蔵する「チベット仏画コレクション」に含まれる木版の白描宗教図像およびチベット仏教古派とボン教の魔除け・厄除けの護符に関する基本情報を収録(画像あり)。〔1,439件〕

毛沢東バッジ
本館が所蔵する1966-1969年に中国大陸の各地で作成された98点の毛沢東バッジの情報(文字や文様)を収録(画像あり)。〔98件〕

映像・音響資料

映像資料目録
本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVDなど映像資料の情報。〔8,426件〕

ビデオテーク
本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。〔860件〕

音楽・芸能の映像
本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。〔849件〕

松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション
松尾三憲(みのり)氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報(画像あり)。〔170件〕

京都大学学術調査隊写真コレクション
「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊」(1955年)、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」(1960年)、「京都大学アフリカ学術調査隊」(1961年～1967年)、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」(1969年)が撮影した写真の情報(画像あり)。〔館内公開:42,210件(内インターネット公開:24,869件)〕

梅棹忠夫写真コレクション ＊
梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報(画像あり)。〔35,481件〕

オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真 ＊
小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報(画像あり)。〔7,999件〕

朝枝利男コレクション ＊
朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報(画像あり)。〔3,966件〕

西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料―大島襄二写真コレクション
大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報(画像あり)。〔館内公開:8,842件(内インターネット公開:7,889件)〕

アフリカ カメルーン民族誌写真集―端信行コレクション
端信行本館名誉教授が1969年から90年代初頭にかけて行った、おもにアフリカのカメルーン共和国での民族学的調査の中で撮影した写真の情報(画像あり)。〔6,543件〕

沖守弘インド写真(日本語版、英語版)
写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報(画像あり)。〔館内公開:22,120件(内インターネット公開:21,971件)〕

ネパール写真(日本語版、英語版)
「西北ネパール学術探検隊」(1958年)に参加した高山龍三氏(当時大阪市立大学大学院生)らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報(画像あり)。〔3,879件〕

西北ネパール及びマナスル写真 ＊
「西北ネパール学術探検隊」(1958年-1959年)が撮影した写真の情報(画像あり)。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」(1953年)科学班の写真(推定)を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。〔620件〕

タイ民族誌映像―精霊ダンス ＊
田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報(画像あり)。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告(タイ語)とも関連づけられている。〔写真:10,082件　調査報告:41件〕

東南アジア稲作民族文化綜合調査団写真 ＊
日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団(1957年)と第二次調査団(1960年)が記録した写真の情報(画像あり)。〔4,393件〕

焼畑の世界―佐々木高明のまなざし
佐々木高明(本館元館長)が調査で撮影・記録した写真の中から、特に日本の焼畑に関するものを収録(画像あり)。〔451件〕

農耕民の世界―岩田慶治のまなざし
岩田慶治(本館名誉教授)が調査で撮影・記録した写真の中から、特に1957年から1962年の間にラオス・タイで撮影されたものを収録(画像あり)。〔342件〕

四国山地の焼畑―福井勝義のまなざし(1969-1972)
福井勝義(本館元助教授)が、1969年に結成した「京都大学焼畑研究会」において、1972年までの間、高知県椿山集落を拠点として焼畑調査を行った際の記録写真を収録(画像あり)。〔211件〕

音響資料目録
本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。〔64,885件〕

音響資料曲目
本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。〔352,748件〕

文献図書資料

図書・雑誌目録(OPAC)
本館が所蔵する図書・雑誌資料(マイクロフィルムなどを含む)の書誌・所蔵情報。〔図書資料:633,629件　雑誌タイトル:17,564件〕

梅棹忠夫著作目録(1934～　)
著書・論文をはじめ本の帯の推薦文にいたるまで、梅棹忠夫本館初代館長のあらゆる著作を網羅した目録情報。〔7,029件〕

言語資料

中西コレクション―世界の文字資料
世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。〔2,729件〕

吉川「シュメール語辞書」
吉川守氏(広島大学名誉教授)が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。〔キーワード:33,450語(40,596頁)〕

Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok(ボントック語音声画像辞書)
Lawrence A.Reid氏(ハワイ大学名誉教授)が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。〔見出し語:14,048語〕

日本昔話資料―稲田浩二コレクション
稲田浩二氏(当時京都女子大学教授)らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料(446本のテープ・約190時間)の情報(音声あり)。音声は館内限定公開。〔3,696件〕

rGyalrongic Languages(ギャロン系諸語)〔英語、中国語〕
長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース(音声あり)。83の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200の文例を収録している。〔語彙:41,078語　文例:15,706件〕

服装・身装文化資料

衣服・アクセサリー
本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報(画像あり)。〔34,411件〕

身装文献
身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1)服装関連日本語雑誌記事(カレント)、2)服装関連日本語雑誌記事(戦前編)、3)服装関連外国語雑誌記事、4)服装関連日本語図書、5)服装関連外国語民族誌で構成。〔190,668件〕

近代日本の身装電子年表
洋装がまだ日常に定着していなかった1868年(明治元年)から1945年(昭和20年)の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。〔14,514件〕

身装画像―近代日本の身装文化
和装と洋装が拮抗していた1868年(明治元年)から1945年(昭和20年)までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。〔6,800件〕

ファクト他

国内資料調査報告集 ＊
日本国内における、1)民具などの標本資料類の所在、2)伝統技術伝承者の所在、3)民族・民俗映像記録の所在、4)民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集(1980年～2003年)をデータベース化。〔21,373件〕

3次元CGで見せる建築―東南アジア島嶼部の木造民家
佐藤浩司本館元准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。民家の3次元CGから作成したgifアニメーションにより建築物内外を巡回して見ることができる。〔38地点、61棟〕

津波の記憶を刻む文化遺産―寺社・石碑データベース
日本の沿岸部に残されている、地震や津波災害の記憶を伝える寺社や石碑、銘板などの情報(画像あり)。〔481件〕

平成の百工比照コレクション
金沢市と金沢美術工芸大学が、全国各地の工芸品について、工程・技法がわかる見本や製品見本、製作道具、材料を収集整理して作成した標本集「平成の百工比照」に関する情報(画像あり)。〔579件〕

柳染色加工所見本裂
柳染色加工所で制作された見本裂約200点について、名称や由来、染織の工程や技法、使用した道具や染料、工夫した点など、制作者の柳清一氏から聞き取った情報(画像あり)。〔185件〕

展示情報データベース
国立民族学博物館が開催した展示(本館展示、特別展、企画展、コレクション展示、新着資料展示)についての基本的な情報を収録(画像あり)。〔199件〕

令和６年度の入館者数

年間入館者

入館者総数	239,861人
1日平均	789人
開館からの累計	12,318,953人

入館者内訳

一般	168,950人
小・中・高・大学生	65,893人
小学生未満	5,018人

特別展示	
みんぱく50周年記念特別展「日本の仮面――芸能と祭りの世界」（令和6年3月28日～6月11日）	44,159人
みんぱく50周年記念特別展「吟遊詩人の世界」（令和6年9月19日～12月10日）	29,873人
企画展示	
みんぱく50周年記念企画展「水俣病を伝える」（令和6年3月14日～6月18日）	53,406人
みんぱく50周年記念企画展「客家と日本――華僑華人がつむぐ、もうひとつの東アジア関係史」（令和6年9月5日～12月3日）	46,480人
巡回展示	
巡回展「ユニバーサル・ミュージアム―さわる！“触”の大博覧会」直方谷尾美術館（令和6年7月6日～9月16日）	2,097人
巡回展「国立アイヌ民族博物館第9回特別展示『驚異と怪異――想像界の生きものたち』」国立アイヌ民族博物館（令和6年9月14日～11月17日）	18,192人

特別展示一覧

展覧会名	展覧会期間
「大アンデス文明展―よみがえる太陽の帝国インカ」	平成元年9月14日～12月12日
「赤道アフリカの仮面―秘められた森の精霊たち」※	平成2年3月15日～5月31日
「海を渡った明治の民具　モース・コレクション展」	平成2年9月13日～12月4日
「ケンペル展―ドイツ人の見た元禄時代」※	平成3年2月7日～4月16日
「大インド展―ヒンドゥー世界の神と人」	平成3年8月1日～11月5日
「文明の十字路・ダゲスタン―コーカサスの民族美術」※	平成4年3月12日～5月19日
「オーストラリア・アボリジニ展―狩人と精霊の5万年」	平成4年9月10日～12月8日
「民族学の先覚者　鳥居龍藏の見たアジア」※	平成5年3月11日～5月14日
「アイヌモシリ―民族文様から見たアイヌの世界」	平成5年6月10日～8月17日
「ジャワ更紗―その多様な伝統の世界」	平成5年9月9日～11月30日
「台湾先住民の文化　伝統と再生」※	平成6年3月10日～5月24日
「絨毯―シルクロードの華」	平成6年9月8日～11月29日
「ラテンアメリカの音楽と楽器」※	平成7年3月16日～5月30日
「現代マヤ―色と織に魅せられた人々」	平成7年9月14日～11月30日
「シーボルト父子のみた日本」	平成8年8月1日～11月19日
「異文化へのまなざし―大英博物館コレクションにさぐる」	平成9年9月25日～平成10年1月27日
「なかはどうなってるの？―民族資料をX線でみたら」※	平成10年3月12日～5月26日
「大モンゴル展―草原の遊牧文明」	平成10年7月30日～11月24日
「南太平洋の文化遺産：ジョージ・ブラウン・コレクション」※	平成11年3月11日～5月31日
「越境する民族文化―いきかう人びと、まじわる文化」	平成11年9月9日～平成12年1月11日
「みんぱくミュージアム劇場―からだは表現する」	平成12年3月18日～5月14日
「進化する映像―影絵からマルチメディアへの民族学」	平成12年7月20日～11月21日
「大正昭和くらしの博物誌―民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミューゼアム」	平成13年3月15日～6月5日
「ラッコとガラス玉」	平成13年9月20日～平成14年1月15日
「2002年ソウルスタイル」	平成14年3月21日～7月16日
「世界大風呂敷展　布で包む　ものと心」	平成14年10月3日～平成15年1月14日
「マンダラ―チベット・ネパールの仏たち」	平成15年3月13日～6月17日
「西アフリカ　おはなし村」	平成15年7月24日～11月25日
「アイヌからのメッセージ―ものづくりと心」	平成16年1月8日～2月15日
「多みんぞくニホン―在日外国人のくらし」	平成16年3月25日～6月15日
「アラビアンナイト大博覧会」	平成16年9月9日～12月7日
「きのうよりワクワクしてきた。」	平成17年3月17日～6月7日
「インド サリーの世界」	平成17年9月8日～12月6日
「みんぱくキッズワールド：こどもとおとなをつなぐもの」	平成18年3月16日～5月30日
「更紗今昔物語―ジャワから世界へ」	平成18年9月7日～12月5日
「聖地★巡礼―自分探しの旅へ」	平成19年3月15日～6月5日
「オセアニア大航海展―ヴァカ モアナ、海の人類大移動」	平成19年9月13日～12月11日
「深奥的中国―少数民族の暮らしと工芸」	平成20年3月13日～6月3日
「アジアとヨーロッパの肖像」	平成20年9月11日～11月25日
「千家十職×みんぱく：茶の湯のものづくりと世界のわざ」	平成21年3月12日～6月14日
「自然のこえ 命のかたち―カナダ先住民の生みだす美」	平成21年9月10日～12月8日
「彫刻家エル・アナツイのアフリカ―アートと文化をめぐる旅」	平成22年9月16日～12月7日
「ウメサオ タダオ展」	平成23年3月10日～6月14日
「千島・樺太・北海道　アイヌのくらし―ドイツコレクションを中心に」	平成23年10月6日～12月6日
「今和次郎　採集講義―考現学の今」	平成24年4月26日～6月19日
「世界の織機と織物―織って！ みて！ 織りのカラクリ大発見」	平成24年9月13日～11月27日
「マダガスカル　霧の森のくらし」	平成25年3月14日～6月11日
「渋沢敬三記念事業　屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」	平成25年9月19日～12月3日
「イメージの力―国立民族学博物館コレクションにさぐる」	平成26年9月11日～12月9日
「韓日食博―わかちあい・おもてなしのかたち」	平成27年8月27日～11月10日
「夷酋列像―蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界―」	平成28年2月25日～5月10日
「見世物大博覧会」	平成28年9月8日～11月29日
「ビーズ―つなぐ・かざる・みせる」	平成29年3月9日～6月6日
「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」	平成29年8月10日～10月10日
「太陽の塔からみんぱくへ―70年万博収集資料」	平成30年3月8日～5月29日
「工芸継承―東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」	平成30年9月13日～11月27日
「子ども／おもちゃの博覧会」	平成31年3月21日～令和元年5月28日
「驚異と怪異――想像界の生きものたち」	令和元年8月29日～11月26日
「先住民の宝」	令和2年10月1日～12月15日
「復興を支える地域の文化―3.11から10年」	令和3年3月4日～5月18日
「ユニバーサル・ミュージアム――さわる！“触”の大博覧会」	令和3年9月2日～11月30日
「邂逅する写真たち ― モンゴルの100年前と今」	令和4年3月17日～5月31日
「*Homō loquēns*「しゃべるヒト」～ことばの不思議を科学する～」	令和4年9月1日～11月23日
「ラテンアメリカの民衆芸術」	令和5年3月9日～5月30日
「交感する神と人―ヒンドゥー神像の世界」	令和5年9月14日～12月5日
「日本の仮面――芸能と祭りの世界」	令和6年3月28日～6月11日
「吟遊詩人の世界」	令和6年9月19日～12月10日
「民具のミカタ博覧会―見つけて、みつめて、知恵の素」	令和7年3月20日～6月3日

※印は、平成13年以前は企画展に区分されていましたが、現在はすべて特別展に統一されています。

インターネット

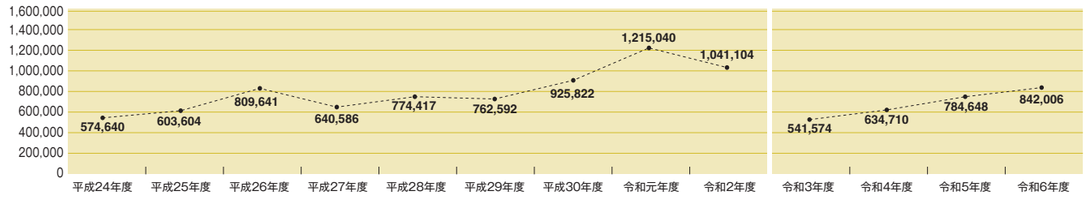
ウェブサイト　https://www.minpaku.ac.jp/
本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育情報の他、刊行物、文献図書資料、標本資料などあらゆる情報を世界に発信しています。

メールマガジン　https://www.minpaku.ac.jp/research/publication/column/enews
メールマガジン「みんぱくe-news」を月1回発行し、最新の研究情報や、特別展・企画展情報、みんぱくゼミナール等の各種事業のお知らせを配信しています。

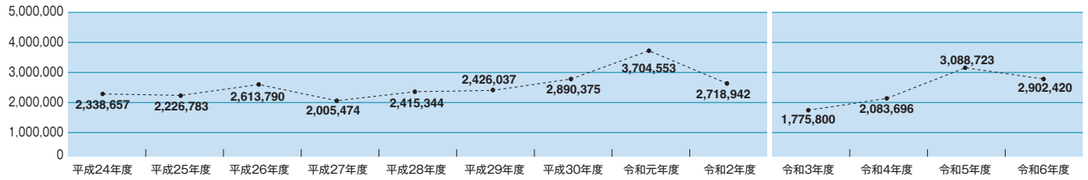
ソーシャルメディア　Facebook　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
X（旧Twitter）　https://x.com/MINPAKUofficial
YouTube　https://www.youtube.com/MINPAKUofficial
Instagram　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial

さまざまなソーシャルメディアを活用して、研究、博物館活動を情報発信するとともに、本館及び文化人類学・民族学に関心をもつ人たちが交流する場を提供しています。

訪問者数（Visits）　令和６年度　842,006



ページビュー数（Page Views）　令和６年度　2,902,420



※令和3年度より、ウェブサイトリニューアルに伴い、統計方法を変更しました。

マスメディアを通じた広報

広く社会に本館の研究や博物館活動について広報するため、マスメディアを通じた広報活動を展開しています。「報道関係者と民博との懇談会」（毎月第3木曜日開催）において、「研究の窓」などのコーナーをもうけ、みんぱくの研究や博物館活動を積極的に紹介しています。 令和6年度はテレビ・ラジオ（24件）、新聞（447件）、雑誌・ミニコミ誌（164件）、WEB・その他（167件）の各媒体総数802件で、本館の活動が紹介されました。

「旅・いろいろ地球人」平成21年4月から毎日新聞に掲載 平成17年4月から平成21年3月までは、「異文化を学ぶ」というタイトルで掲載

出版活動

広報・普及

MINPAKU Anthropology Newsletter
月刊みんぱく
みんぱくカレンダー

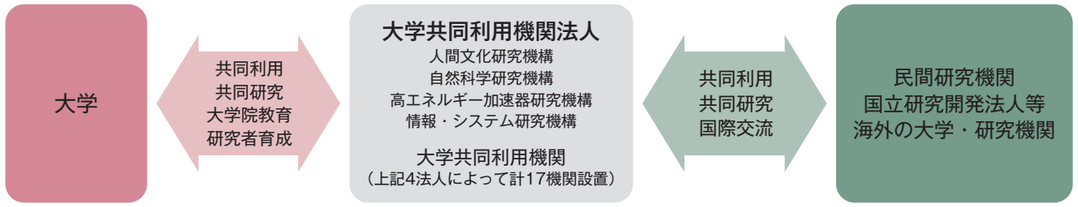
展示解説

展示図録「吟遊詩人の世界」
展示図録「デザインから読み解く、日本と世界のくらしの造形
民具のミカタ博覧会　見つけて、みつめて、知恵の素」

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　https://www.nihu.jp/

大学共同利用機関とは

各研究分野における我が国の中核的研究拠点（COE）として、個別の大学では維持が困難な大規模な施設設備や膨大な資料・情報等を国内外の大学や研究機関等の研究者に提供し、それを通じて効果的な共同研究を実施する研究機関です。



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

人間文化研究機構（人文機構／ NIHU）は、人間文化研究を推進する6つの大学共同利用機関を支え、さらなる研究の発展を図る法人として、2004年に設置されました。 現在の構成機関は、以下の6機関です。

- 国立歴史民俗博物館（歴博）
- 国文学研究資料館（国文研）
- 国立国語研究所（国語研）
- 国際日本文化研究センター（日文研）
- 総合地球環境学研究所（地球研）
- 国立民族学博物館（民博）

6つの機関は、それぞれの研究分野における国際的な中核研究拠点として、国内外の大学等研究機関、研究者と連携して、基盤的研究及び学際的研究を推進しています。 人文機構は、これら6つの機関同士、あるいは機構内の機関と機構外の大学等とをつなぎ、研究資源の構築、実証的研究、理論的研究を進めるとともに、自然科学との連携を含む新しい研究領域の創成を目指して、人間文化に関する総合的な学術研究とその発信に取り組んでいます。

人文機構のミッションとビジョン

【ミッション】

人文機構は、人間文化研究に関する唯一の大学共同利用機関法人として、人間とその文化を総合的に探究し、その探求を通じて、真の豊かさを問い、自然と人間の調和を図り、人類の存続と共生に貢献することをミッションとしています。

【ビジョン】

ミッションの実現に向けて、法人第4期には、人間文化の多様性や社会の動態を踏まえて、現代社会の様々な課題を追究し、その解決を志向するとともに、人と自然が調和し、科学技術と人間性とが共存する未来社会の実現のための指針となるべき新しい価値観や人文知を提示することを目標としています。その達成のために、社会に開かれた新たな知の形成を目指して、2022年4月に人間文化研究創発センターを設置しました。 センターでは、国内外の様々な人々との共創による開かれた人間文化研究という理念のもと、デジタル技術を用いた研究基盤を構築するとともに、その基盤を活用した共同研究を推進し、さらに社会の様々な人々との交流と協働の場としての「知のフォーラム」の形成、国際的なネットワーク形成に取り組んでいます。

開かれた人間文化研究をめざす「人間文化研究創発センター」

人間文化研究創発センターでは、人文機構のミッションとビジョンに基づき、「基幹研究プロジェクト」と「共創先導プロジェクト」を推進しています。

基幹研究プロジェクト

機構の根幹をなす人間文化に関する基盤的・学際的研究として、3類型11の研究プロジェクトを実施し、学術ネットワークの拡大や新分野創出等によって、大学共同利用機関としての使命の実現を図っています。

機関拠点型 人文機構の６機関が主体となって実施するプロジェクト	日本歴史文化知の構築と歴史文化オープンサイエンス研究（歴博）
	データ駆動による課題解決型人文学の創成（国文研）
	開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究（国語研）
	「国際日本研究」コンソーシアムのグローバルな新展開―「国際日本研究」の先導と開拓―（日文研）
	自然・文化複合による現代文明の再構築と地球環境問題の解決へ向けた実践（地球研）
	フォーラム型人類文化アーカイブズの構築にもとづく持続発展型人文学研究の推進（民博）
広領域連携型 機構内の複数の機関が連携して実施するプロジェクト	横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して（主導機関：歴博・民博）
	人新世に至る、モノを通した自然と人間の相互作用に関する研究（主導機関：地球研）
	異分野融合による総合書物学の拡張的研究（主導機関：国文研）
ネットワーク型 他の大学や研究機関と連携して実施するプロジェクト	グローバル地域研究推進事業（主導機関：民博）
	歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業（主導機関：歴博）

共創先導プロジェクト

各機関及び国内外の大学等研究機関が連携して、研究資源や研究成果の共有化及び地域との共創・協働等を通して社会に貢献するプロジェクトです。 これらを通して、「社会共創」「デジタル化」「国際共創」という3つの研究展開を図ります。

3つの研究展開	共創促進研究 機構内外の多様な組織や人々との共創による共同研究を推進し、３つの研究展開を促進します。	共創促進事業 ３つの研究展開を加速化させるための事業を実施し、機構内機関及び機構外大学等研究機関の研究の高度化・創発を図ります。
社会共創	コミュニケーション共生科学の創成	知の循環促進事業
デジタル化	学術知デジタルライブラリの構築	デジタル・ヒューマニティーズ（DH）促進事業
国際共創	日本関連在外資料調査研究	国際連携促進事業

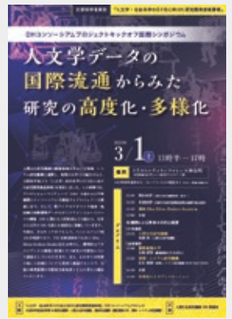
【TOPICS】DiHuCo ※（DHコンソーシアムプロジェクト）がスタートしました。

※ DiHuCo : The Digital Humanities Consortium Project of Japan

人間文化研究機構は、慶應義塾大学および情報・システム研究機構と連携し、複数の大学との協力のもと、文部科学省より「人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業」を受託しました。この事業では、デジタルヒューマニティーズ（DH）を進める大学等機関とコンソーシアムを構成するプロジェクトを推進します。

そして、東アジアのテキストや地図・地誌類の国際標準データのガイドラインとユースケースの構築、DHに関わる人材育成などの面から、日本の人文学のDXを通じた高度化に貢献していきます。

DHコンソーシアムプロジェクト（DiHuCo）キックオフ国際シンポジウムの様子



総合研究大学院大学

総合研究大学院大学は、大学共同利用機関等を基盤とする大学院大学です。大学共同利用機関等の世界トップレベルの研究環境を教育の場として国内外の大学・大学院との相互交流を深め、幅広い視野や総合性、豊かな国際性をもった高度な能力を有する研究者の養成を目的としています。

組織図

大学院教育

本館には、総合研究大学院大学先端学術院先端学術専攻人類文化研究コース（博士後期課程）が設置されています。先史時代から現代まで人類が世界各地で形成してきた多様な文化に関する教育・研究をおこなっています。文化人類学・民族学とその関連分野の視点に立ち、特定の文化を記述分析する民族誌学的研究や、特定の観点から文化を比較する通文化的研究を指導します。学生はフィールド調査で得たデータ、本館が所蔵する標本、映像・音響、文献資料等を活用しながら研究し、博士論文の完成を目指しています。

人類文化研究コースの授業内容

コースの教育は、個々の教員による授業や研究指導と、複数の教員が指導するゼミナールからなっています。ゼミナールには主に1年次生を対象とする「基礎演習(通称、1年生ゼミナール)」と、2年次生以上を対象に論文作成の指導を目的に行われる「論文演習(同、論文ゼミナール)」があります。
このほかに、学生交流協定に基づき、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院国際文化学研究科および人間発達環境学研究科の4つの研究科がそれぞれ定める単位互換対象科目を履修することもできます。
学生はおおむね1年次においてフィールド調査の準備をすすめ、2年次以降に指導教員の指導のもとフィールド調査をおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での議論を経ながら博士論文の完成をめざします。

地域文化学専攻・比較文化学専攻・人類文化研究コースの学生

大学院入学定員および現員

令和7年4月1日現在

専攻／コース	入学定員	現員 1年次	現員 2年次	現員 3年次	計
人類文化研究コース	4	3	2	4	9
地域文化学専攻				7	7
比較文化学専攻				6	6
計		3	2	17	22

※令和5年4月、地域文化学専攻および比較文化学専攻は人類文化研究コースに統合。

年度別学位授与者数

年度	地域文化学専攻 課程博士	地域文化学専攻 論文博士	比較文化学専攻 課程博士	比較文化学専攻 論文博士	人類文化研究コース 課程博士	人類文化研究コース 論文博士	計
平成３年度			1				1
平成４年度							
平成５年度			1	1			2
平成６年度	2		1				3
平成７年度	2		1				3
平成８年度		3					3
平成９年度	3		4				7
平成10年度	4	2					6
平成11年度							
平成12年度	2		2	1			5
平成13年度	1	1	2	1			5
平成14年度	1	1		2			4
平成15年度							
平成16年度	2	3					5
平成17年度	4	2		2			8
平成18年度	2		3				5
平成19年度	2	1	3				6
平成20年度	1		1				2
平成21年度		1	1	1			3
平成22年度	2		2	3			7
平成23年度	3		1	1			5
平成24年度	1	1	1	1			4
平成25年度			1	1			2
平成26年度	2	1	2				5
平成27年度	3	1					4
平成28年度	1	1	1				3
平成29年度	1		1				2
平成30年度	1						1
令和元年度	1		2				3
令和２年度	1	1	2				4
令和３年度	4		3	1			8
令和４年度	1		1				2
令和５年度	1					3	4
令和６年度	1		1				2
計	49	19	38	15		3	124人

論文博士号取得希望者の受入

日本学術振興会が実施する「論文博士号取得希望者に対する支援事業」の支援を受ける者（論博研究者）が、本館において研究指導にあたる教員の下、研究をおこないます。

利用案内

開館時間

開館時間　10：00 ～ 17：00　（入館は16：30まで）
休館日　水曜日　（水曜日が祝日の場合は、直後の平日が休館）
年末年始　（12月28日～1月4日）

観覧料

区分	個人	団体（20名以上）及び割引※
一般	780円	660円
大学生	340円	270円
高校生以下	無料	

特別展はその都度別に定めます

障がい者手帳をお持ちの方は、付添者1名とともに無料で観覧できます。
日本文化人類学会会員及びICOM（国際博物館会議）会員・日本博物館協会会員の方は、無料で観覧できます。（要会員証）

※以下の方々は、割引料金で観覧できます。
　20名以上の団体、大学等*の授業でご利用の方、
　3ヶ月以内のリピーター、満65歳以上の方（要証明書等）
　*大学等は、短大、大学、大学院、専修学校の専門課程
※なお、短大生・大学生・大学院生の方は、教員が同行し、授業で展示場を利用する場合は、事前にお申し込みいただくと、観覧料が無料になります。詳しくはお問い合わせください。

お問い合わせ先　Tel.06-6876-2151（代表）　Fax.06-6875-0401

ウェブサイト　https://www.minpaku.ac.jp/

案内・サービス

■国立民族学博物館友の会
お問い合わせ先：Tel.06-6877-8893（平日のみ 9:00～17:00 千里文化財団）、minpakutomo@senri-f.or.jp

国立民族学博物館友の会は、国立民族学博物館の活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。
本館研究者の協力のもとに、『季刊民族学』を発行し、多様な文化に直接ふれる「研修の旅」や「体験セミナー」、各種講演会などを企画し実施しています。

友の会カウンター

友の会刊行物『季刊民族学』

■ミュージアム・ショップ（営業時間 10:00～17:00）
お問い合わせ先：Tel.06-6876-3112

世界各国の工芸品や文化人類学・民族学に関する書籍のほか、国立民族学博物館オリジナルグッズなどを購入することができます。

ミュージアム・ショップ

■レストラン（営業時間 11:00～16:30　ラストオーダー16:00）
お問い合わせ先：Tel.06-6310-0810

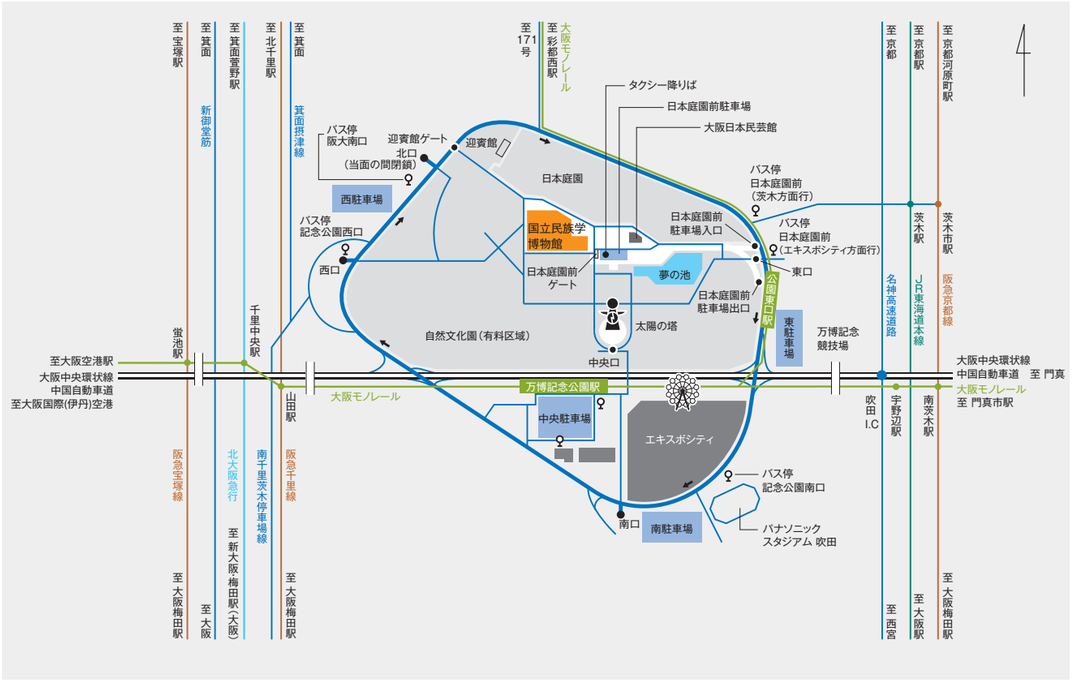
ハンバーグや生パスタなどのお食事メニューや手軽な軽食・デザートを用意しています。
座席数は110席あり、少人数から団体まで予約いただけます。
また、団体のお客様については弁当の予約も可能です。

レストラン

交通のご案内

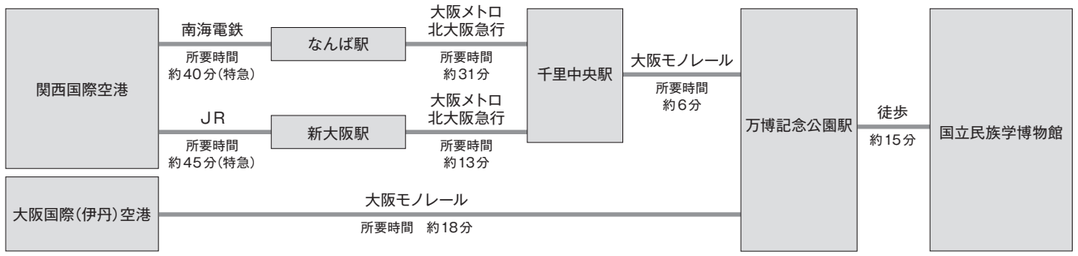
● 大阪・万博記念公園内
○ 大阪モノレール…「万博記念公園駅」または「公園東口駅」下車徒歩約15分
○ バス…阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
○ 乗用車…万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
○ タクシー…万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。
※ 万博記念公園各ゲートで、当館の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。
※ 万博記念公園をご利用になる場合は、同園入園料が必要です。

周辺図



主要ターミナルからのアクセス

当館までの交通手段はいくつか方法がありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



国立民族学博物館のシンボルマークは、創設時（昭和49年）に制作されたもので、地球（民族・文化）の連帯と活動を象徴し、突起している部分は7つの大陸・文明圏をあらわし、円と突起で囲まれた部分は7つの海をあらわしています。

ISSN 1344-5413　2025.7 発行

要覧
2025

国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1